

庄内地方北部の10～11世紀代の土器群の様相

植 松 暁 彦

1 はじめに

近年、庄内平野では、圃場整備事業に伴い数多くの古代遺跡の調査が行われてきた。特に庄内地方の北部地域は、資料数の増加に伴い古代集落の様相が明らかに成りつつ、筆者も以前『庄内高瀬川と月光川流域の集落変遷』（植松1997）で土器相や集落の動向を検討した事がある。

しかし、10～11世紀代の資料は、全体に散発的であまり良好な資料に恵まれなかった。全県的にみても、当該期は遺跡数の減少が指摘され（阿部他1998）、その様相が不明瞭な時期にあたる。

現在でも状況に大きな変化はないが、昨今10世紀前葉の降下とされる十和田 a 火山灰が、県内の内陸部（高瀬山遺跡・北向遺跡）や庄内地方南半（興野川原遺跡）でも検出され、地域性も検討できる状況になりつつある。

本稿では、筆者の前述論考時に欠けた同地域の遊佐町木原遺跡の一括資料等を紹介し、当該期の土器群を再検討し、古代～中世に至る当地域の様相を併せて概括する。

2 研究史

庄内地方の古代の土器編年は、1970年代後半～80年代前半に大枠が定められた。

最初に佐藤庄一氏の「山形県における平安時代の土器様相」は、集落出土の一括資料を内陸部の紀年木簡や北陸地方等との対比から9～11世紀までの土器編年を示した。（佐藤1979・1983）

川崎利夫氏は、境興野遺跡の調査で当該期の主体を占める所謂赤焼土器の観察から、焼成方法や性格等を論じ、赤焼土器の変遷^{1・2)}を示した（川崎1981）。

阿部明彦氏は、北陸地方の須恵器窯の吉岡編年との対比から、上記佐藤氏の編年の若干の修正と全体に半世紀程年代が遡る事等を、報告書中で指摘した（阿部1983）。

その後、1980年代後半に入り、岩見誠夫・船木義勝・

能登谷宣康氏は、山形県の須恵器窯資料を秋田県内の窯跡と対比させ、8世紀初頭～10世紀後半までの編年観を示した（船木他1988）。本県でも阿部明彦・伊藤邦弘氏が、この編年観を機軸に県内の窯跡を整理し、県内での須恵器窯の分布や変遷を明らかにした（阿部・伊藤1995）。

渋谷孝雄氏は、県内で官衙的な遺跡として著名な下長橋遺跡を調査され、出土した火山灰のある遺構や地震跡、地鎮遺構、施釉陶器等を整理し、特に10世紀以降の全体的な土器様相や変遷を示した（渋谷1988）。

1990年代に入り、阿部明彦氏は、北目長田・上高田遺跡の調査から、一括資料の分類等を行い、同形態の土器群が出土する遺構や層準のまとまりを土器組成として捉え、当地域の土器相や変遷をまとめた（阿部1995）。

筆者は、先学研究を踏まえ庄内北端部の土器群を、新たに古代秋田城の新資料や、近年の畿内の施釉陶器の編年観、火山灰出土遺構の分析等から8世紀後半～11世紀初頭の土器変遷と実年代を概観した（植松1997）。

同時期に伊藤武士氏は、「出羽における10・11世紀の土器様相」を集成され、出羽北半は秋田県の地域毎を整理し、出羽南半（庄内地方）は筆者の土器変遷を引用し、最も新しい段階として境興野遺跡の一群を追加し11世紀前半と位置づけた（伊藤1998）。

その後、阿部明彦氏は、城柵官衙検討会の一連の研究で、県内の古代の窯跡・集落出土の詳細な土器編年を組まれ、一部報告書時との年代観の齟齬はあるが、庄内平野の集落出土の土器群を、全体に8世紀前半～10世紀後葉に分類し編年観を示した。（阿部他1998・1999）

一方、中世側から高桑弘美氏が、筆者や伊藤氏の変遷を基に、隣県などとの比較から下長橋（S X1105）より境興野（S X26）を新相とし、11世紀前半をあて、古代の最も新しい段階とした（高桑2003）。

山口博之氏も中世「遊佐荘大楯遺跡の成立」で庄内地方の古代集落の展開を精査し、上記遺跡を同様に評価した（山口2003）。



庄内高瀬川と月光川流域遺跡分布図

遺跡存続年代表						出土遺物・遺物
No	遺跡名	8C後	9	10	11C前	
1	大坪					旧阿用・板材料・実物19・埋没130
2	宅田					
3	右田					石部・麻紙
4	上高田					旧阿用(表裏部)・実物10
5	木ノ下					
6	橋崎					
7	堂田					北陸系水鳥系稿
8	北田原田					製塩土器多・実物10
9	中田					
10	新田					
11	月川					
12	吹浦					郷内住居・綾網
13	木田					瓦類・実物20
14	厚城					実物28・地蔵鉢・市路鉢
15	地正					実物22
16	前田					
17	塚田					
18	佐賀					
19	小瀬田					旧阿用・板材料・実物47
20	下長城					石部・地蔵多・地蔵鉢・地蔵・実物31
21	栗田					旧阿用・石部・地蔵等
22	仁田					旧阿用・地蔵・地蔵
23	宮ノ下					石部・実物123
24	道中					
25	三田					旧阿用(9C前半)
26	地蔵田					
27	上山崎					
28	野瀬					旧阿用・実物12
29	北子崎下					
30	松崎					
31	古瀬					

※ Noは第4・5図に対応する。点線は不明瞭な部分。 ※ 数字は出土点数を示す



遺跡位置図と出土遺物
(※大文字は表1のNoと対応し、
小文字は表の出土遺物と対応する)



8世紀後半



9世紀第1四半期



9世紀第2四半期



9世紀第3四半期



9世紀第4四半期



10世紀第1四半期



10世紀第2四半期

第1図 庄内北部の遺跡位置と概要図 (植松1997)

3 土器編年

本稿では、近年の土器編年や変遷を整理し、近年の阿部氏の編年とも概ね誤差は少ないと判断し、前述筆者の土器変遷（植松1997）に最初準拠する（第2・3図）。

また、本稿では、上記論考が庄内北部の小地域（遊佐町）に限定した事もあり、筆者の最も新しい部分の次段階に、伊藤武士氏が指摘した庄内平野中央部の酒田市境興野遺跡を加える（伊藤1998）。

以下は、詳細は前述拙稿に譲るが、本稿の当該期Ⅴ期以降の資料を記しておく。

Ⅴ期（9世紀4/4期）：宅田遺跡 S K 7・堂田遺跡 S E 51・大坪遺跡 S G 1 F-4 の一部（同一墨書等）。

Ⅵ期（10世紀1/4期前半：火山灰降下期）：浮橋遺跡 S E 11・13・下長橋 S K 28。

Ⅶ期（10世紀1/4期後半：火山灰降下以後）：下長橋遺跡 S B 1・2・4・櫛待遺跡 S E 2・小深田遺跡 S D 77。

Ⅷ期（10世紀2/4期）：下長橋遺跡 S B 3・5・6。

Ⅸ期（10世紀3/4～11世紀1/4期）：下長橋遺跡 E U 825・826・S X 1105・浮橋 S K 16。

X期（11世紀1/4～2/4期）：境興野 S K 26。

4 木原遺跡1次調査の一括資料

本項では、先の土器変遷を作成した時に欠けた木原遺跡1次調査の一括資料（阿部・植松1993）を紹介し、時期や形態を再検討する（第4～9図）。

木原遺跡は、庄内平野北端の遊佐町大字宮田字木原に所在し、本遺跡の位置する一帯は遺跡の北側を西流する庄内高瀬川と南側を西流する月光川によって形成された自然堤防（微高地）上に立地する。標高は約7mを測る。

周辺には、本遺跡同様に両河川の自然堤防上に、奈良～平安時代の集落遺跡が多く、当該期では上高田・浮橋・下長橋遺跡等が散発的に分布する。（第1・4図）

1次調査は、平成4年に県圃場整備事業に伴い、約6,400m²が調査された。主な遺構は掘立柱建物跡4棟以上、井戸跡4基、大小の土坑、墓坑、畝状溝跡等が検出され、ほぼ南北方向に主軸を持ち、重複関係等から2時期以上の変遷が窺える。（第5図）

遺物の主体は、一部9世紀前半代の古相の土器群もあ

るが、広域火山灰（十和田a）を含む土坑や落ち込み遺構から多量の土器群が出土し、火山灰降下前後の10世紀前半頃と考えられる。他に包含層からK-90後半段階の緑釉陶器や「伴」・「虫」等の少数の墨書土器、二次調査では方形の帯対金具、小形の梵鐘等も出土した。

報告書では、主な遺構の変遷と遺物群の年代観を、Ⅰ期：S K 304・540・393（9世紀1/4～2/4期）、Ⅱ期：S K 302・S X 617（10世紀1/4期）、Ⅲ期：S E 30・S X 938・977・S K 7（10世紀2/4期）と比定した。以下に主な3つの遺構を報告書に沿って概述する。

S K 302土坑（第6図）

木原遺跡では、一部土坑上面を小溝や暗渠に壊されるが、最もまとまりのある一括資料の一つである。調査区中央の長径約3.9m、短径2.9mの隅丸方形で、確認面からの深さは約76である。覆土は7層からなり、中位の4層に火山灰が厚さ2～4堆積する。遺物は、この火山灰層を挟んでその直上下から、多くの赤焼土器の坏類が主に出土した。図化資料できたのは24点である。

赤焼土器の坏類（B 1）は、報告書でa～d類に形態や口径指数（器高／口径×100）等で細分した。

B 1 a類（18—17）：高径指数40前後の器高の高い一群。B 1 bと共に法量的に大形品。

B 1 b類（18—14）：高径指数35前後を示す器高がやや低く相対的に外傾度大きい一群。

B 1 c類（18—16）：高径指数32、33前後を示す一群。

B 1 d類（18—8）：高径指数30を切る歪みの著しい浅身一群で、器高が坏類で最も低い。

B 1 a～b類は、共に法量的に大形で、口縁部の立ち上がりは内湾ないし直線的外傾で、内湾例は口縁部の外反度がいづらか強い。平均高径指数は35前後ある。

煮沸形態では、赤焼土器の甕・鉢・鍋が認められる。甕・鉢類の口縁部は丸みを帯びて口唇部が僅かに上方に短く立ち上がる。鍋は頸部の括れなど屈曲がほとんど見られず、体部から一連で続き、口唇部は甕類と同様の形態である。なお、他に図示しないが、破片資料として須恵器類では、底径が小さくヘラ切りの須恵器坏（A 1 d類）や、丸みの強い肩の甕片がある。

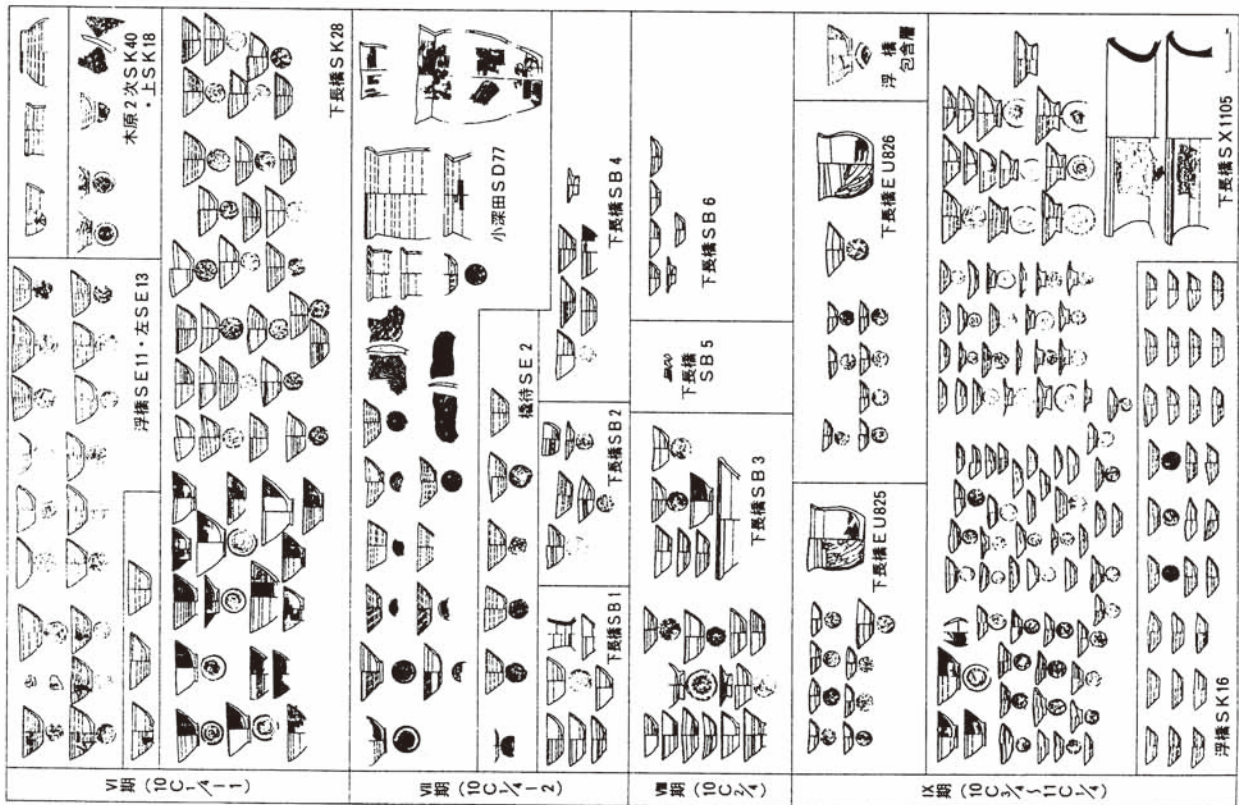
報文では、層位的に火山灰降下期の10世紀前葉に一括廃棄されるが、時期的に「主体的な赤焼土器類よりは先行するもの」と考え、まとめて10世紀第1四半期とした。

庄内平野の集落遺跡の土器編年・変遷図

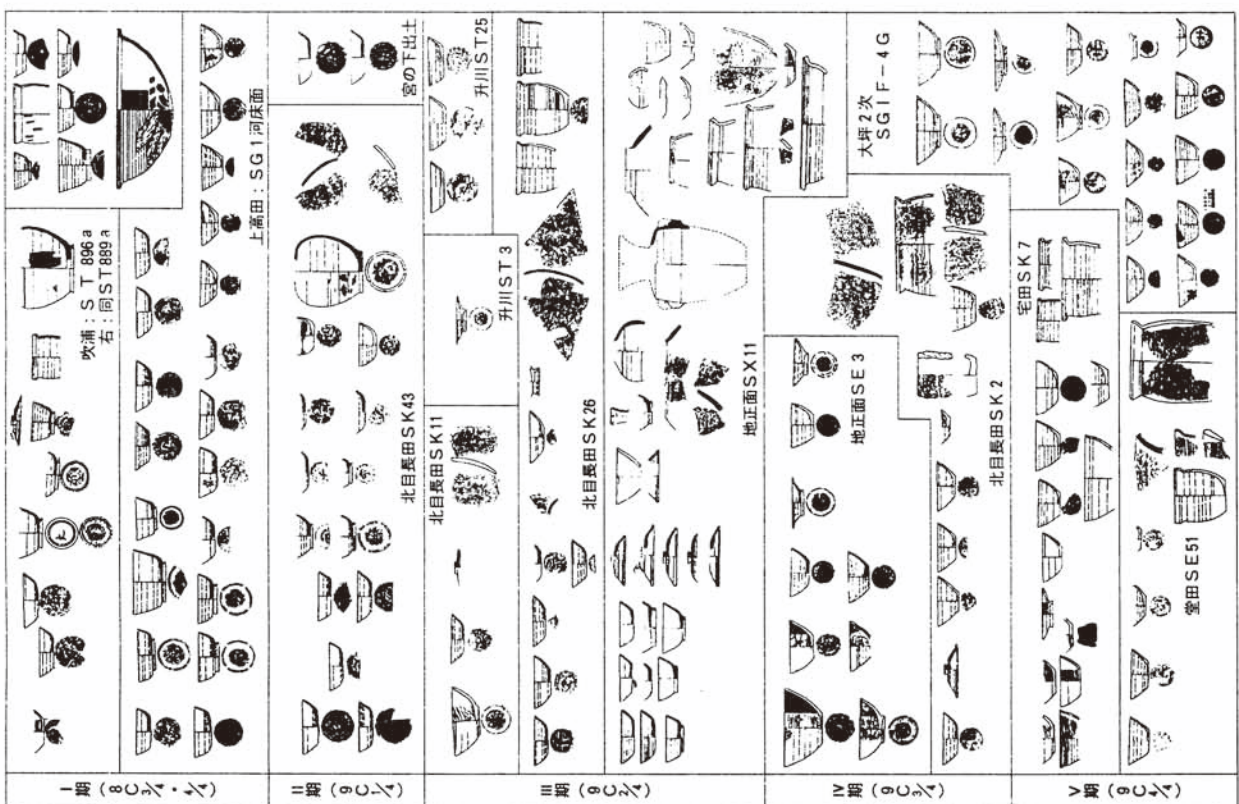
時期	佐藤 (1979-1983)	川崎(1979)	阿部(1983)	渋谷(1989)	阿部 (1995・1995)	植松(1997)・伊藤(1998)	阿部(1998)	植松(1997)年代観資料
9世紀	3/4	関B	地正面SX11	下長橋SP1101 (下長橋Ⅰ期)	上高田Ⅰb期 北目長田Ⅲ期	地正面SE3 北目長田SK2(北目長田Ⅲ期)	大坪2次SG1 F-4G	地床面:緑釉・灰釉磁飯皿(K-90) 今塚:木簡(853年)
	4/4		地正面SE3		上高田Ⅱ期	宅田SK7 堂田SE51	北目長田Ⅲ期	大坪:「廿」墨書灰釉(K-90) 道伝:木簡(896年)
10世紀	1/4古	茅針谷地	地正面SE3	下長橋SK28 (下長橋Ⅱ期)	下長橋SK28(下長橋Ⅱ期) 浮橋SE11・13 木原2次SK18・40	下長橋SK28(下長橋Ⅱ期) 浮橋SE11・13 木原2次SK18・40	下長橋Ⅱ期 浮橋SE11・13・15	下長橋:浮橋・木原: 十和田a(915年)純粋層堆積 浮橋包含層:折戸53号(10C前半)
	1/4新			手蔵田12SE45 手蔵田12SK118			上高田Ⅰb期*	下長橋:榎符・小深田: 十和田a(915年)ブロック混入 下長橋:SB・SD重複関係
	2/4		上台ST2	下長橋SB1・2・4 (下長橋Ⅲ期) 手蔵田2SK142 沼田SD42	下長橋SB3・5・6(下長橋Ⅳ期) 小深田SD77	下長橋SB1・2・4(下長橋Ⅲ期) 榎符SE2 小深田SD77	上高田Ⅰb期*	下長橋:榎符・小深田: 十和田a(915年)ブロック混入 下長橋:SB・SD重複関係
	3/4			下長橋SB3・5・6 (下長橋Ⅳ期)			上高田Ⅱ期* 下長橋Ⅲ期 手蔵田2SK116 手蔵田2SK120 手蔵田2SK142	下長橋:尾北篠岡4号(10C前半)
11世紀	3/4	境興野		下長橋SB3・5・6 (下長橋Ⅳ期)	上高田Ⅲ期 下長橋Ⅴ期 境興野	浮橋SK16 下長橋地鎮遺構(EU825・826) 下長橋SX1105(下長橋Ⅴ期)	浮橋SK16 境興野SK159	下長橋 :美濃虎渓山1号(10C後半～末葉) :重複関係・地震痕跡の有無 浮橋包含層 :東濃丸石2号(10C末～11C初頭)
	4/4			下長橋地鎮遺構 (EU825・826) 下長橋SX1105 (下長橋Ⅴ期) 境興野SK4・26			上高田Ⅲ期 下長橋地鎮遺構 (EU825・826) (下長橋Ⅴ期) 境興野SK26	
	1/4	後田SK602	境興野SK26			境興野SK26(伊藤1998)		
	2/4							
12世紀	3/4	平形G地点 SD4				大楯		撰閑家遊佐莊初見(1147年)
	4/4							
	1/4							
	2/4							

*各氏の編年観は、その報告書や論考の本文中に準拠して筆者がまとめた。
*太字は複数の編年・変遷案で使われている資料を表す。
*植松(1997)は遺構毎の変遷であるが、一部遺構の後ろの括弧内は渋谷(1989)・阿部(1998)のどの部分に当たたるかを比較するたためけ加えた。

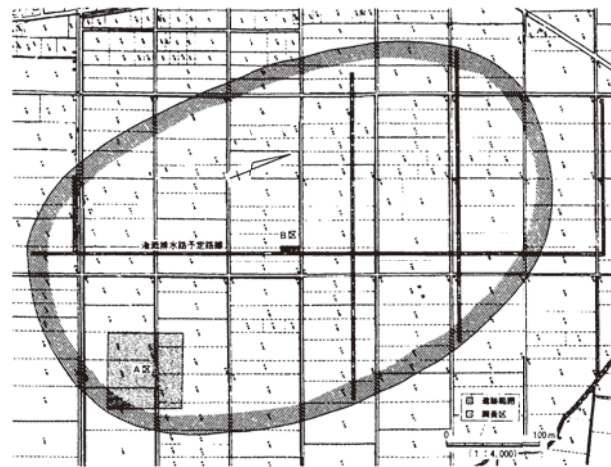
第2図 土器編年史変遷図



土器組成変遷図(2)
第3図 土器組成変遷図 (植松1997)



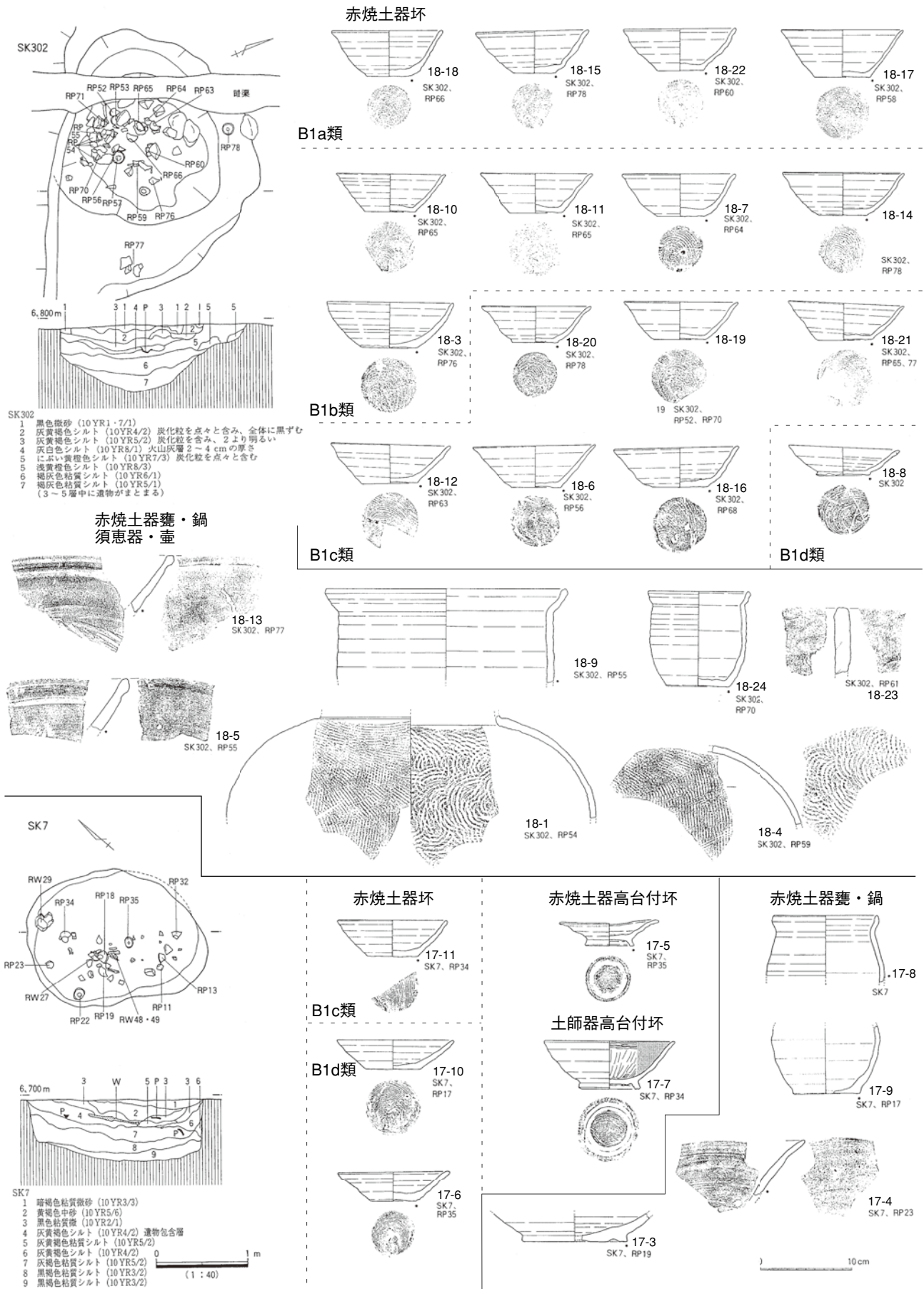
土器組成変遷図(1)



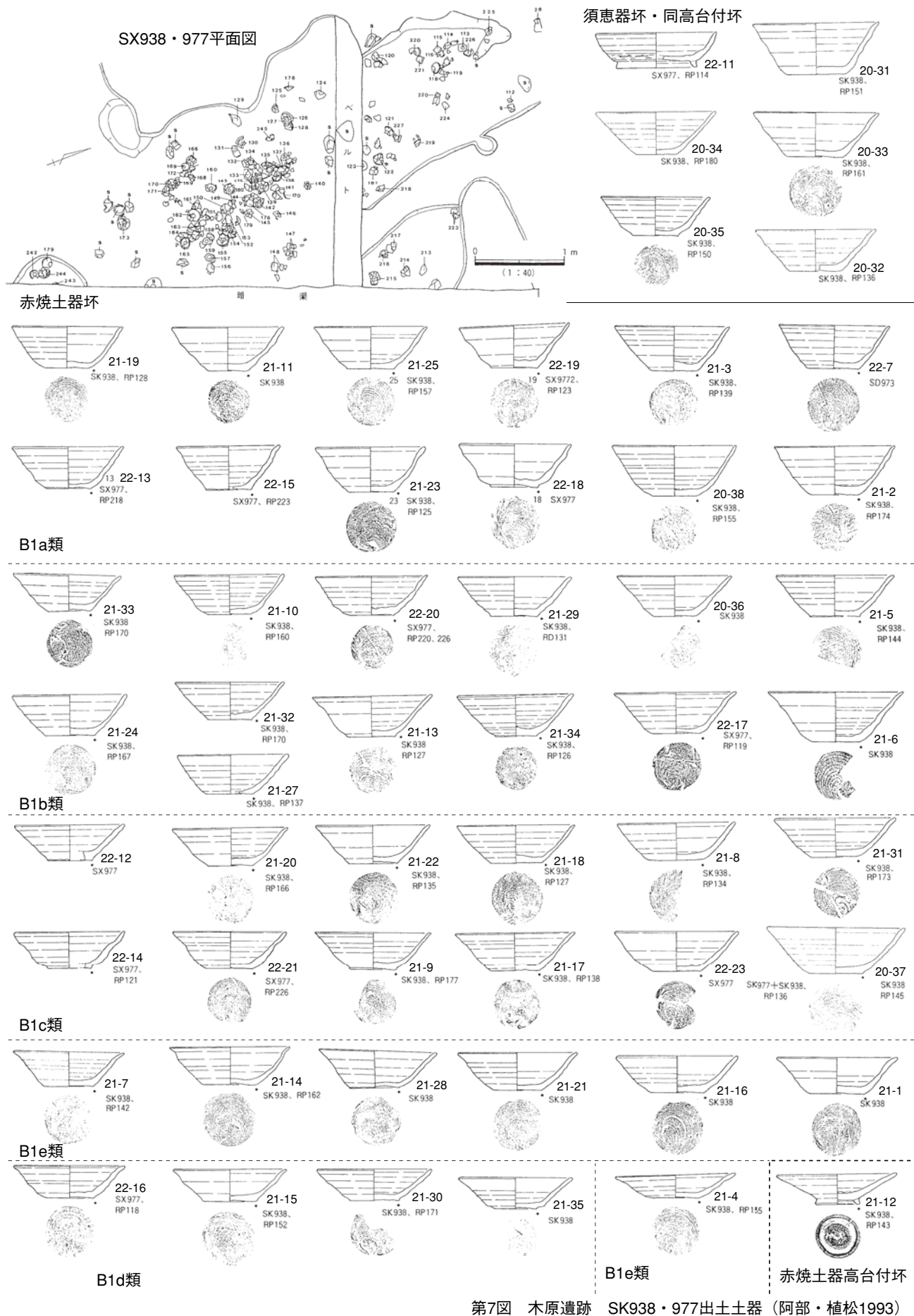
第4図 木原遺跡調査区位置図 (阿部・植松1993)

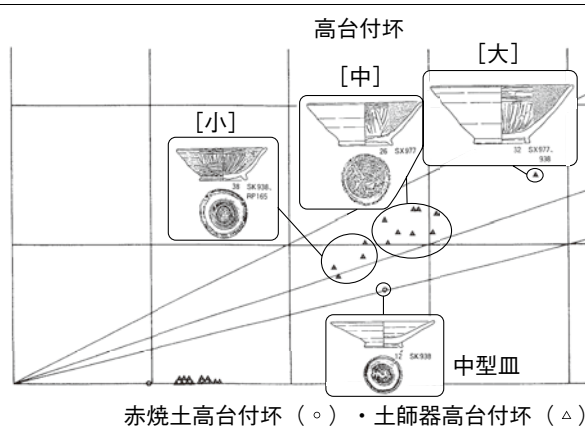
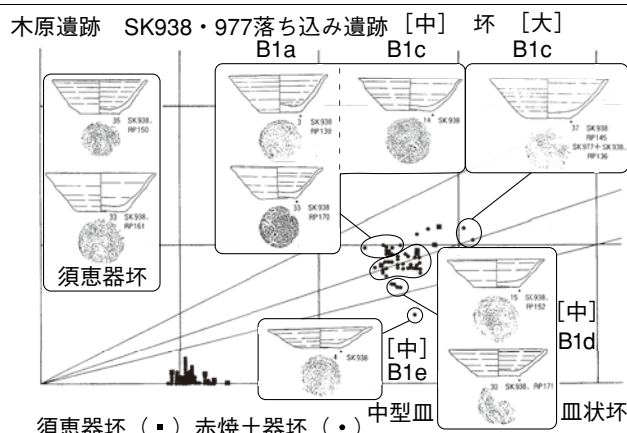
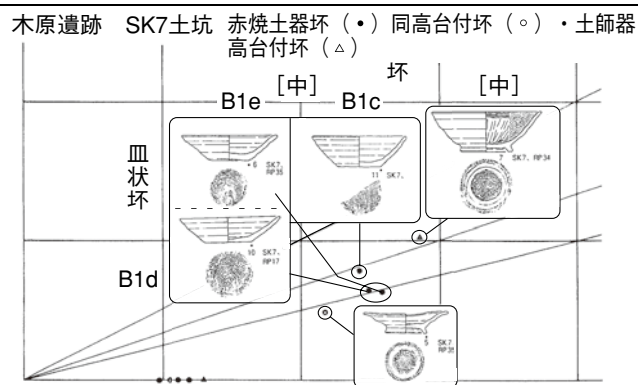
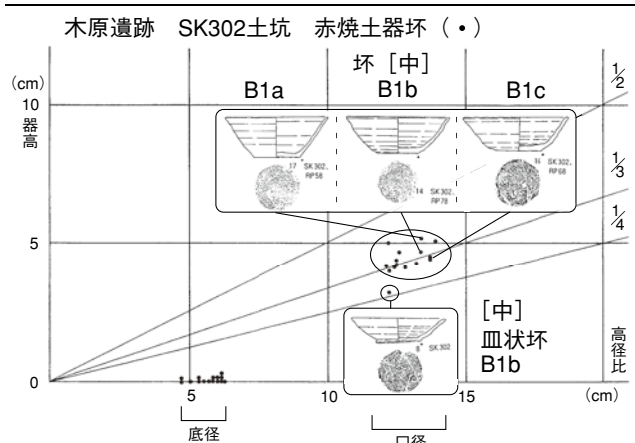
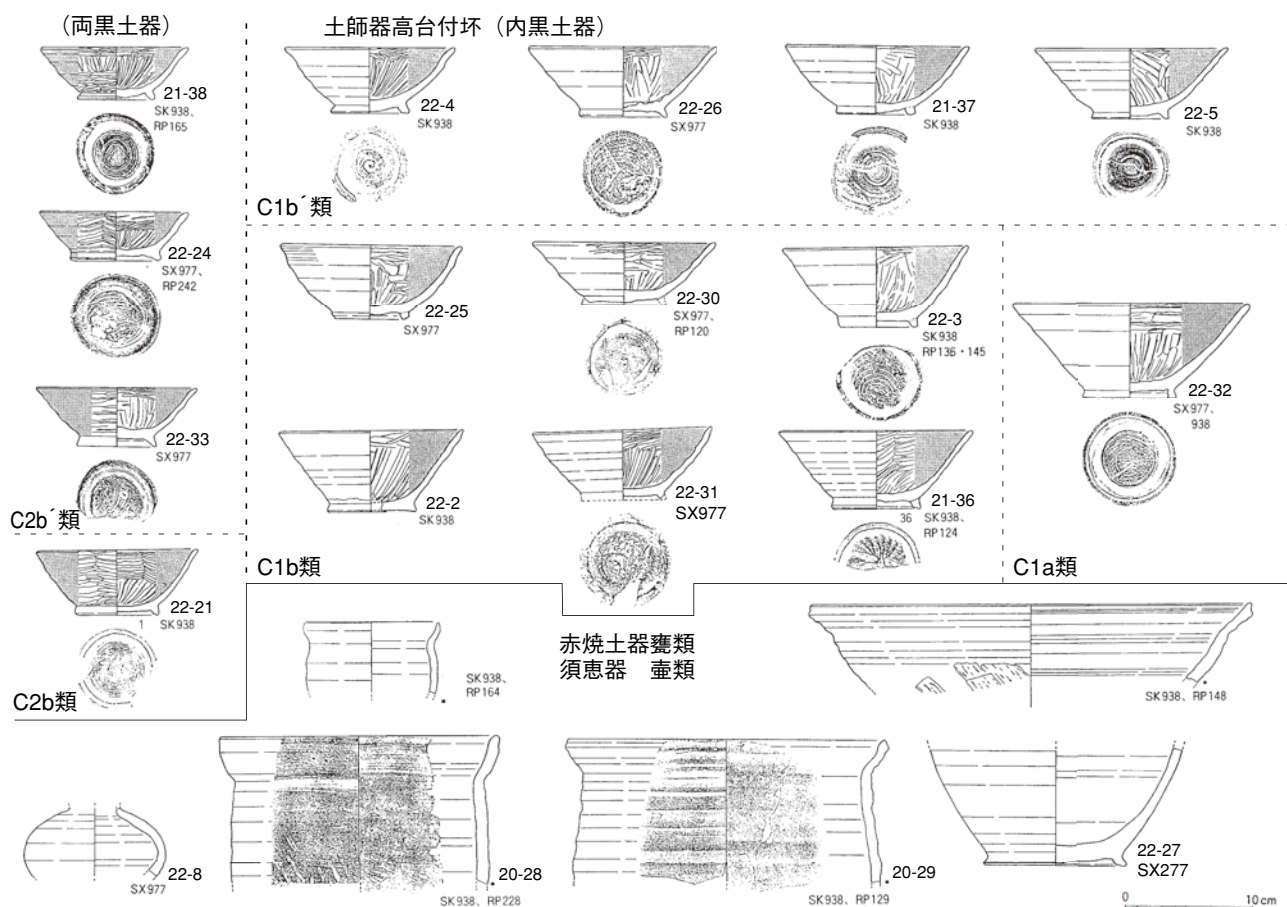


第5図 木原遺跡遺構配置図 (阿部・植松1993)



第6図 木原遺跡 SK302・SK7 (阿部・植松1993一部改変)





第8図 木原遺跡 SK302、7、SX938・977の法量分布と高径比

図	番号	種別	器種	口径()	底径()	器高()	高径指数	出土地点	R P 番号	備考
17	11	赤焼土器	坏	12.1	5.6	4.0	33.1	S K 7	R P 34	
17	6	赤焼土器	坏	12.4	4.9	3.3	26.6	S K 7	R P 35	
17	10	赤焼土器	坏	12.9	6.0	3.2	24.8	S K 7	R P 17	
17	5	赤焼土器	高台付坏	10.9	5.3	2.5	22.9	S K 7	R P 35	
17	3	赤焼土器	高台付坏	—	11.6	—	—	S K 7	R P 19	
17	7	土師器	高台付坏	14.3	6.5	5.2	36.4	S K 7	R P 34	内黒
17	8	赤焼土器	甕	11.4	—	—	—	S K 7	—	
17	9	赤焼土器	甕	—	7.3	—	—	S K 7	R P 17	
18	18	赤焼土器	坏	12.2	4.7	5.0	41.0	S K 302	R P 66	
18	17	赤焼土器	坏	13.4	6.5	5.2	38.8	S K 302	R P 58	
18	7	赤焼土器	坏	12.6	5.3	4.7	37.3	S K 302	R P 64	
18	15	赤焼土器	坏	12.6	4.7	4.7	37.3	S K 302	R P 78	
18	22	赤焼土器	坏	12.4	5.1	4.6	37.1	S K 302	R P 60	
18	3	赤焼土器	坏	13.9	6.1	5.1	36.7	S K 302	R P 76	
18	11	赤焼土器	坏	12.5	5.8	4.4	35.2	S K 302	R P 65	
18	14	赤焼土器	坏	13.4	5.3	4.7	35.1	S K 302	R P 78	
18	10	赤焼土器	坏	12.1	5.6	4.2	34.7	S K 302	R P 65	
18	19	赤焼土器	坏	12.5	5.8	4.2	33.6	S K 302	R P 52,70	
18	6	赤焼土器	坏	13.7	5.5	4.5	32.8	S K 302	R P 56	
18	20	赤焼土器	坏	12.2	5.0	4.0	32.8	S K 302	R P 78	
18	12	赤焼土器	坏	13.2	6.2	4.3	32.6	S K 302	R P 63	
18	16	赤焼土器	坏	13.7	6.0	4.4	32.1	S K 302	R P 68	
18	21	赤焼土器	坏	12.8	6.1	4.1	32.0	S K 302	R P 65,77	
18	8	赤焼土器	坏	12.2	6.0	3.2	26.2	S K 302	—	
18	9	赤焼土器	甕	26.7	—	—	—	S K 302	R P 55	
18	24	赤焼土器	甕	11.4	6.8	10.4	—	S K 302	R P 70	
22	15	赤焼土器	坏	11.6	5.1	4.9	42.2	S X 977	R P 223	
21	23	赤焼土器	坏	12.3	5.2	5.0	40.7	S K 938	R P 125	
20	38	赤焼土器	坏	13.9	5.0	5.6	40.3	S K 938	R P 155	
21	2	赤焼土器	坏	13.5	5.2	5.4	40.0	S K 938	R P 174	
21	11	赤焼土器	坏	12.6	4.6	4.9	38.9	S K 938	—	
21	3	赤焼土器	坏	12.9	5.2	5.0	38.8	S K 938	R P 139	
22	7	赤焼土器	坏	12.4	5.7	4.8	38.7	S D 973	—	
22	19	赤焼土器	坏	12.4	5.2	4.8	38.7	S X 977	R P 123	
22	18	赤焼土器	坏	12.5	5.3	4.8	38.4	S X 977	—	
21	19	赤焼土器	坏	12.4	4.9	4.7	37.9	S K 938	R P 128	
21	25	赤焼土器	坏	12.5	5.2	4.7	37.6	S K 938	R P 157	
22	13	赤焼土器	坏	12.6	4.9	4.7	37.3	S X 977	R P 218	
21	6	赤焼土器	坏	15.2	5.4	5.6	36.8	S K 938	—	
21	24	赤焼土器	坏	12.8	5.5	4.6	35.9	S K 938	R P 167	
21	34	赤焼土器	坏	13.1	4.7	4.7	35.9	S K 938	R P 126	
21	10	赤焼土器	坏	12.4	5.0	4.4	35.5	S K 938	R P 160	
22	20	赤焼土器	坏	12.5	4.9	4.4	35.2	S X 977	R P 220,226	
20	36	赤焼土器	坏	12.8	4.7	4.5	35.2	S K 938	—	
21	29	赤焼土器	坏	12.8	5.3	4.5	35.2	S K 938	R P 131	
21	33	赤焼土器	坏	12.0	4.7	4.2	35.0	S K 938	R P 170	
21	27	赤焼土器	坏	12.6	5.4	4.4	34.9	S K 938	R P 137	
21	5	赤焼土器	坏	13.2	5.6	4.6	34.8	S K 938	R P 144	
21	13	赤焼土器	坏	13.4	5.4	4.6	34.3	S K 938	R P 127	
21	32	赤焼土器	坏	12.4	4.9	4.2	33.9	S K 938	R P 170	
22	17	赤焼土器	坏	13.6	5.3	4.6	33.8	S X 977	R P 119	
21	22	赤焼土器	坏	12.8	5.4	4.3	33.6	S K 938	R P 135	
20	37	赤焼土器	坏	15.5	6.0	5.2	33.5	S K 938,977	R P 145,136	接合
22	14	赤焼土器	坏	12.3	4.9	4.1	33.3	S X 977	R P 121	
22	23	赤焼土器	坏	13.9	5.2	4.6	33.1	S X 977	—	
21	20	赤焼土器	坏	13.0	5.2	4.3	33.1	S K 938	R P 166	
22	21	赤焼土器	坏	12.8	5.3	4.2	32.8	S X 977	R P 226	
22	12	赤焼土器	坏	12.3	5.0	4.0	32.5	S X 977	—	
21	31	赤焼土器	坏	13.6	5.2	4.4	32.4	S K 938	R P 173	
21	18	赤焼土器	坏	13.3	5.9	4.3	32.3	S K 938	R P 127	
21	9	赤焼土器	坏	13.0	5.2	4.2	32.3	S K 938	R P 177	
21	17	赤焼土器	坏	13.5	5.5	4.3	31.9	S K 938	R P 138	
21	8	赤焼土器	坏	13.2	6.1	4.2	31.8	S K 938	R P 134	
21	28	赤焼土器	坏	13.3	5.4	4.2	31.6	S K 938	—	
21	7	赤焼土器	坏	12.4	5.4	3.9	31.5	S K 938	R P 142	
21	14	赤焼土器	坏	13.4	6.0	4.2	31.3	S K 938	R P 162	
21	21	赤焼土器	坏	13.5	5.5	4.2	31.1	S K 938	—	
21	16	赤焼土器	坏	13.6	5.9	4.1	30.1	S K 938	—	
21	1	赤焼土器	坏	13.6	6.2	4.0	29.4	S K 938	—	
22	16	赤焼土器	坏	12.6	5.4	3.6	28.6	S X 977	R P 118	
21	15	赤焼土器	坏	12.7	5.9	3.6	28.3	S K 938	R P 152	
21	35	赤焼土器	坏	12.8	4.7	3.5	27.3	S K 938	—	
21	30	赤焼土器	坏	12.9	5.3	3.5	27.1	S K 938	R P 171	
21	4	赤焼土器	坏	13.4	5.2	2.5	18.7	S K 938	R P 155	
22	22	赤焼土器	坏	—	5.1	—	—	S X 977	R P 226	
21	12	赤焼土器	高台付坏	13.4	4.9	3.4	25.4	S K 938	R P 143	
22	2	土師器	高台付坏	14.5	7.0	6.3	43.4	S K 938	—	内黒
22	3	土師器	高台付坏	14.6	6.1	6.3	43.2	S K 938	R P 136,145	内黒
22	25	土師器	高台付坏	14.4	6.0	5.9	41.0	S X 977	—	内黒
22	32	土師器	高台付坏	18.6	7.3	7.5	40.3	S X 977,938	—	内黒
22	1	土師器	高台付坏	12.7	6.5	5.1	40.2	S K 938	—	内黒
21	36	土師器	高台付坏	15.3	6.9	6.1	39.9	S K 938	R P 124	内黒
22	4	土師器	高台付坏	13.5	6.2	5.1	37.8	S K 938	—	内黒
21	37	土師器	高台付坏	14.4	6.1	5.4	37.5	S K 938	—	内黒
22	26	土師器	高台付坏	14.9	6.9	5.5	36.9	S X 977	—	内黒
22	33	土師器	高台付坏	12.6	6.2	4.6	36.5	S X 977	—	内黒
22	5	土師器	高台付坏	15.1	5.9	5.5	36.4	S K 938	—	内黒
21	38	土師器	高台付坏	11.6	6.0	4.2	36.2	S K 938	R P 165	内黒
22	24	土師器	高台付坏	11.7	7.0	3.9	33.3	S X 977	R P 242	内黒
22	29	土師器	高台付坏	—	6.6	—	—	S X 977	R P 115	内黒
22	30	土師器	高台付坏	14.3	—	—	—	S X 977	R P 120	内黒
22	31	土師器	高台付坏	14.1	—	—	—	S X 977	—	内黒
20	31	須恵器	坏	14.3	6.7	5.7	39.9	S K 938	R P 151	
20	34	須恵器	坏	13.5	4.7	4.8	35.6	S K 938	R P 180	
20	33	須恵器	坏	14.1	6.2	5.0	35.5	S K 938	R P 161	
20	35	須恵器	坏	12.2	5.1	4.3	35.2	S K 938	R P 150	
20	32	須恵器	坏	13.5	5.9	4.7	34.8	S K 938	R P 136	
22	11	須恵器	高台付坏	13.5	9.0	3.9	28.9	S X 977	R P 114	

※図・番号は報告書番号を表す。なお、種別・器種・高径指数順を表す。

※口径・底径・器高は、残存値・推定値を含む。

第9図 木原遺跡SK302・7・SX938・977 土器観察表

S X 938・977落ち込み遺構（第7・8図）

調査区西辺部に土器の密集する不整形の落ち込み遺構である。長径約5.6m、短径約1.4m以上の南北に伸びる浅い溝状で、確認面からは、深さ数 ～20 と浅い。

当初は、隣接する別個の遺構（S X 938・977）として捉えていたが、浅い掘り込みや火山灰の塊を斑状に混入する覆土、土器の集中的な出土状況等の共通性から同一の遺構と判断したもので、所謂土器溜まり状を呈する。

土器の主体は、赤焼土器の供膳器で、坏では200個体以上が確認された。その他、須恵器と土師器（黒色土器）の坏類も若干認められたが、双方でも一割に満たない分量である。両者の中では、土師器（黒色土器）の量的優位が特徴的にみられた。図化できた資料は55点である。

主体の**赤焼土器坏**は、B 1 a ～ B 1 d 類がある。他に新しい形態や器種もある。

B 1 e 類（21－4）：新しいタイプの身が浅く口縁の大きく開く皿状形態を示すもの。

B 2 類（21－12）：高台付の皿。

これら坏類は、平均的高径指数34で、前述 S K 302 と同等である。しかし、浅身の B 1 d 類の主体や、新しい形態器種（B 1 e 類）が加わる組成からは、より後出の様相と判断された。

土師器（C 類）では、台付の黒色土器碗があり、16点図化。出土数からは、供膳器組成の一定割合を担うと推測される。内黒（C 1 類）・両黒（C 2 類）の大小で識別され、更に形態的に細分される。

C 1 a 類（22－32）：大形で内黒の口径18 以上のもの。

C 1 b 類（22－26）：中形で高径指数が40前後のもの。

C 2 b 類（21－38）：小形で口径・器高ともに小振りな指数35前後のもの。

須恵器（A 類）では、坏と高台付坏、壺などが認められたが、供膳組成ではほぼ払拭されるようである。

須恵器坏類は、明らかに古相の箱型逆台形³⁾（21－12）があるが、主に口径13 前後で、赤焼土器土器坏の B 1 a ～ b 類に類似する形態（高径指数35前後）である。

煮沸具では、赤焼土器の甕と鉢があり、口縁部は S K 302 と同様な特徴だが、口唇部の肥厚はほぼ減少する。

時期的には、S K 302 と近接するが、赤焼土器の新しい類型や、覆土に火山灰を塊で混入する（明らかな 2 次堆積）等の状況から幾分後出の組成と判断し、報文で10世

紀第2 四半期とした。

S K 7 土坑（第7図）

調査区東辺部の長径約 2 m、短径約1.5mの楕円形で深さは約68 あり。覆土は9層からなり、遺物は4層を中心に中～下位で出土した。火山灰は未検出である。赤焼土器が主に出土し、図化は6点である。

赤焼土器の供膳形態は、坏類が B 1 c ・ d 類の器高が更に低下した **B 1 e 類（17－6）** に近い形態がある。高台付皿（**B 2 類：17－5**）は、S X 938（21－12）例よりも身が浅く口縁部の外反も強い。他に土師器の内黒土器は、中形で台付の碗状で口縁がやや開く。

煮沸具は、鉢・鍋があり、口唇の肥厚が無く頸部でやや外傾する程度である。貯蔵具は須恵器の壺がある。

時期的には、報告書で土器の形態などから S X 938・977 と同様の10世紀第2 四半期とした。

5 木原遺跡の再検討(十和田 a 火山灰と法量分布から)

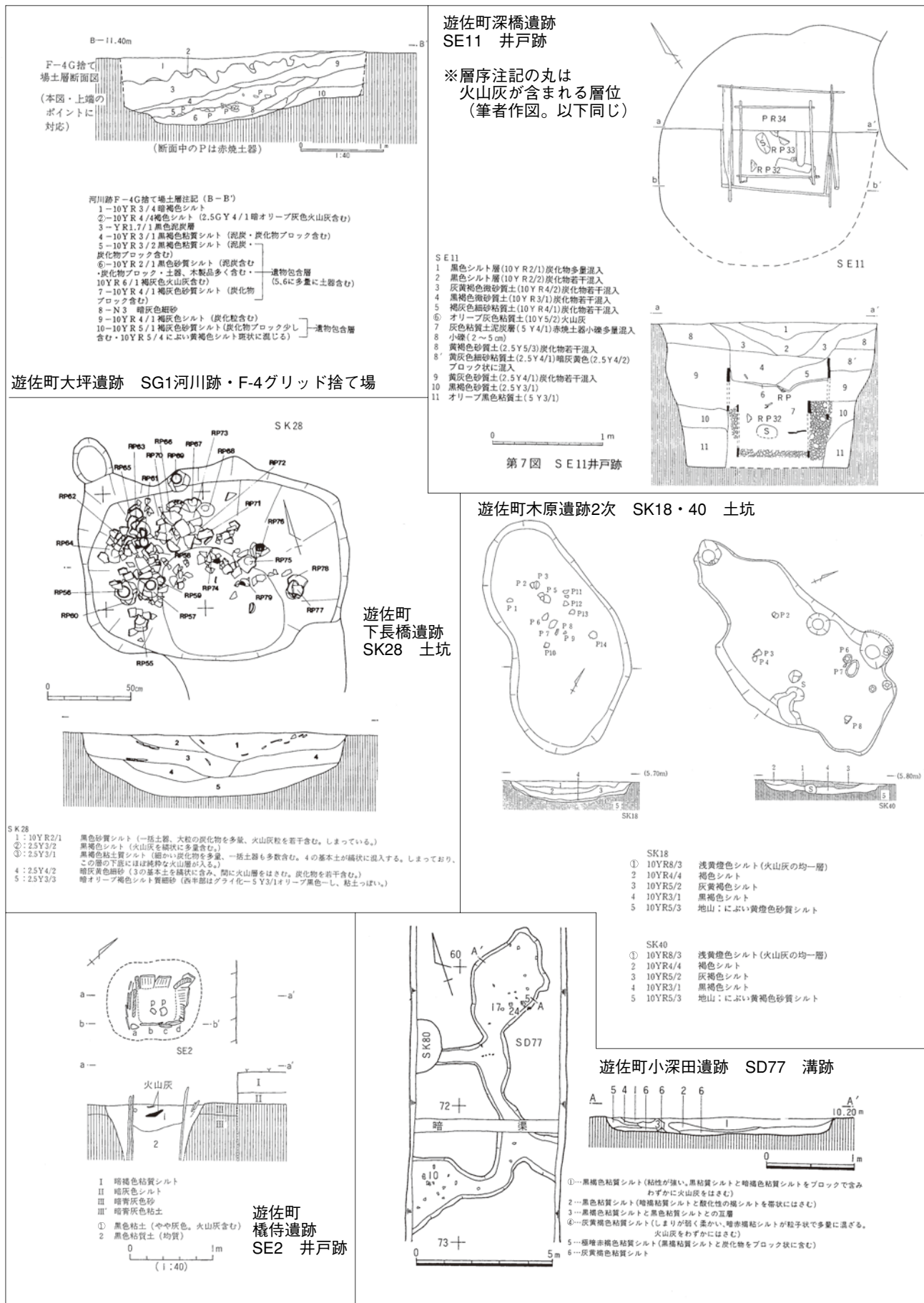
本項では、①本県で一般に915年降下とされる十和田 a 火山灰を含む周辺遺跡の遺構と、木原遺跡の一括資料が対応するか再検討したい。

具体的には、前述十和田 a と考えられる広域火山灰の覆土の混入の仕方と土器の出土状況等との対比を試みた。以前の土器変遷作成時（植松1997）には、覆土に純粋な層準として入る火山灰降下時期に近時した遺構と、覆土に明らかに二次堆積状^{4・5)} にブロックや粒状に混入する火山灰降下以後の遺構に大別した。本稿では、更に前者の土器群が火山灰層の上・下のどちらかを注意し、木原遺跡との共通性を検討した（第10・11図）。

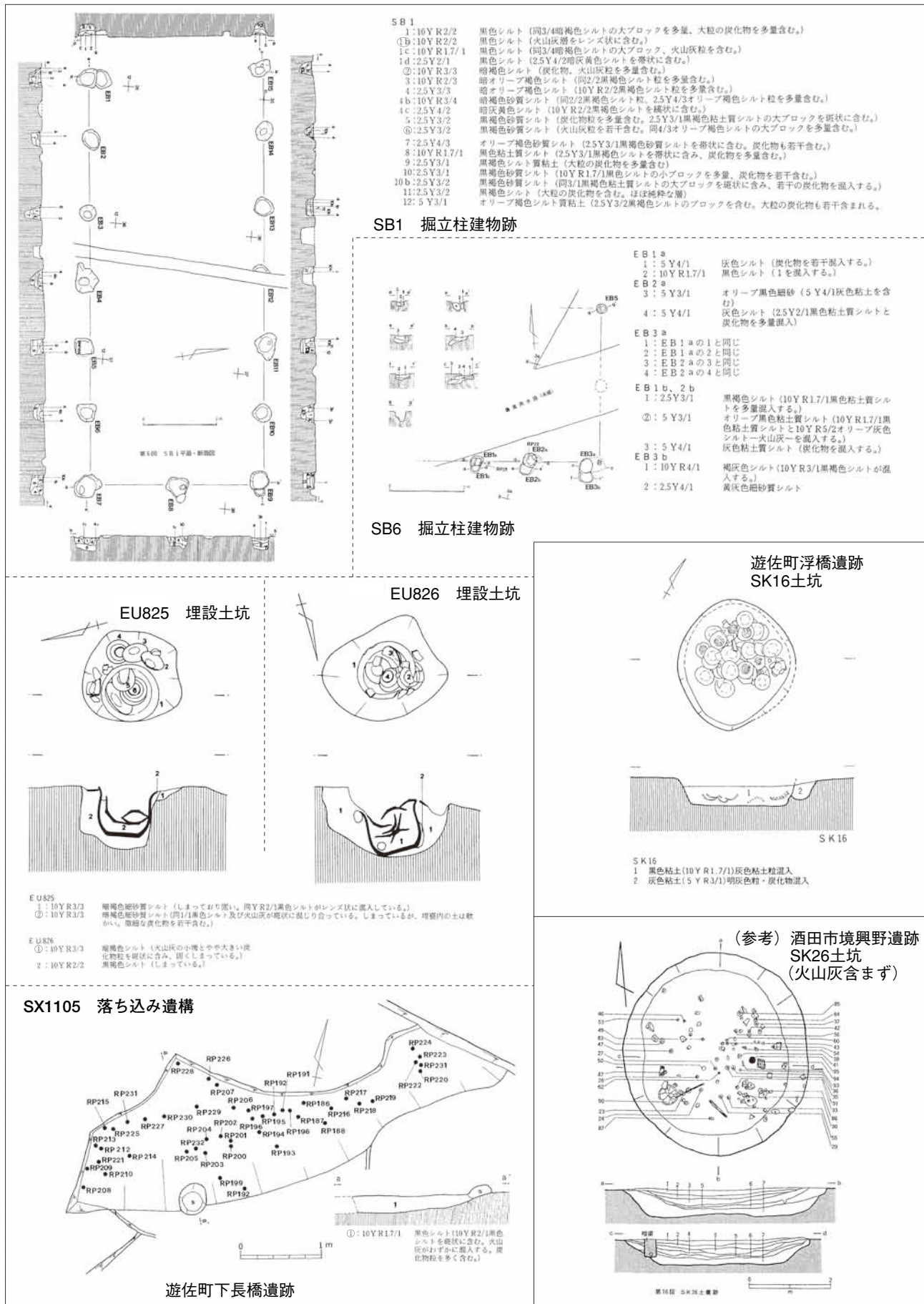
更に②上記遺跡出土の土器群の法量や高径比の分布と、木原遺跡資料を検討し、土器形態の変化を考えたい。

これは、土器の形態変化として、数量が一定量ある遺構を抽出し、土器組成の主体を占め、形態変化が著しい供膳器の坏・皿類を中心に口径と器高（法量）、底径の数量の分布図や高径比を検討した（第12～14図）。

そのため、供膳器は、坏・皿内での種別（土師器・赤焼土器）・器種組成（坏・皿類／無台・有台）や、口径（X 軸）と器高（Y 軸）・底径（X 軸）の分布図（法量）を作成し、法量分布の大小や集中分布域の広がりや変化を検討した⁶⁾。また、口径と器高の高径比（器高／口径。高径指数：×100）も、1/2（高径指数50）・1/3（高径



第10図 庄内北部の白色火山灰を含む遺構群 (1)



第11図 庄内北部の白色火山灰を含む遺構群 (2)

指数33)・1/4 (高径指数25)の推移も含めて概観した。

なお、当該期の土器群の変遷を更に把握するため、当該期以前の筆者(植松1997)の9世紀後半の土器群(大坪遺跡)も同様に行い、一部阿部氏が指摘する当地域の山海窯跡資料(阿部1999)も補完した(第12図)。

結果①・②からは、主体の供膳器の種別組成では、時期が新しくなると須恵器の消失、赤焼土器への増加と集約、黒色土器が少量ながら古代末まで一定の組成を占める事などが改めて分かる(第12～16図)。

器種組成では、赤焼土器は坏から皿形態への変化と、有台の多様化(柱状高台・足長高台出現)と増加、土師器は無台から有台への変化と一定の数量や法量確保が上げられる(第13～14図)。

法量分布では、特に坏・皿類を中心に、時期が下るにつれて、口径と器高の集中域が左下がりに、底径は左側に分布が移動し、全体に小型化していく事が分かる。高径(口径と器高)比も徐々に低くなり、約1/3前後から1/4前後に移行していく(第16図)。

これらからは、全体に細かい形態変化を包む時期毎の法量分布(大・中・小)の変化(主体の交代や、集中や拡散)が窺え、それらを受容する当時の社会状況が反映しているのだろう。

さて、木原遺跡の資料を概括すれば、**S K 302土坑**は、浮橋遺跡S E 11や下長橋遺跡S K 28例(植松Ⅵ期)と類似し、後述の点から両者の中間的な様相も推測された。

木原S K 302の土器の出土状況は、火山灰層(F 4層)をほぼ挟み出土する。一方、浮橋S E 11・下長橋S K 28は同様に火山灰層(浮橋F 6層・下長橋F 3層底部)を含むものの、出土土器の主体は前者が火山灰層の下位、後者が火山灰の上位で(第10・11図)、その新旧が推定される。

S K 302の法量分布図の集中域からは、一部黒色土器を欠くが赤焼土器坏が主体で、前代の9世紀後半代の大坪遺跡S G 1(火山灰層の下位土器群)より、全体に器高が低くなり、集中域が口径約8 前後に小型化し集約され、下長橋S K 28や浮橋S E 11に近い。

しかし、下長橋S K 28は、木原S K 302と高径比(高径比約1/3強)やその集中域は同等だが、底径が約5 前後に縮小化し、より新相の様相を呈する。浮橋S E 11は、赤焼土器坏が主体で口径や底径が木原S K 302と類

似するが、器高は概ね深身で高く分布域が異なり、前代の古相(9世紀後半)の様相を残す。

つまり木原S K 302は、全体では下長橋S K 28に近いが、新相の底径の縮小化までには至らない浮橋S E 11との中間的な段階と考えられ、数量や器種の欠落の課題はあるが、前述の出土状況等からも915年の火山灰降下期に最も近い遺構の一つと判断される。

なお、木原S K 302からは、新形態の高径比1/4に近い器高の低い**皿状の坏**が出土し、前段階では認められない新要素の出現も窺える。

次に、木原遺跡**S X 938・977落ち込み遺構**は、土器溜り状の出土状況で、覆土に火山灰を塊やブロックで多く含み、明らかな火山灰降下後の二次堆積の新相を呈する。しかし、土器の取上げ後の遺構完掘状況(報告書図版)からは、底面に火山灰層の薄い広がり等が看取られ、火山灰降下直後の時期とも考えられた。

実際、木原S X 938・977の赤焼土器の坏類の高径や底径の分布集中域・高径比(約1/3前後)は、前述火山灰層より上位に土器が出土し、同様の出土状況を示す下長橋S K 28例と近似する。土師器(黒色土器:内黒・両黒)も有台坏が主体で、無台坏類が中心の前代の大坪遺跡S G 1より、下長橋S K 28以降の有台が主体となる同様の器種組成の時期が窺える(植松Ⅵ期)。

他にS X 938・977の種別・器種構成では、底部糸切りの須恵器坏が若干認められるが、赤焼土器坏が明らかに主体を占め、下長橋S K 28では認められない高径比が1/4前後の皿状坏や皿も確実に存在し、新相の様相を示す。但し、次期の小皿はなく至っていない。

土師器も須恵器坏より数的に優勢で、両黒・内黒があり、法量は下長橋S K 28では明確でなかったが、全体に両黒の方が少なく、小さい事が分かる。

また、須恵器坏類は、下長橋S K 28等の同時期とされる遺構群から出土せず、数量的にも前出のものが混じった事も考えられる。しかし、阿部氏が同時期の須恵器生産窯とした山海窯跡S K 17・18・96より法量や高径比が大きく、最も新相の形態が残った可能性もある。

S K 7土坑は、覆土に明確な広域火山灰を含むかは明らかでないが、未だ赤焼土器坏と黒色土器高台坏から成る器種組成や、主体的な赤焼土器坏の口径が縮小化し、高径分布が高径比約1/3～1/4内に収まる低比率への

移行などから、当該期でも木原 S K302や S X938・977より後出の段階と考えられる。

これらは、数量的な課題はあるが、下長橋 S B 1・2・4（植松Ⅶ期）から S B 3・5・6（植松Ⅷ期）の赤焼土器の皿状坏や高台皿の高径分布や高径比と近似し、次期（植松Ⅸ期）の浮橋 S K16、下長橋 E U825・826、同 S X1105は、小型の皿類が主体を占める事から、この段階までには至っていない。

なお、筆者は、このⅨ期を以前、埋設遺構や性格不明遺構の特殊な性格上などから、10世紀後半～11世紀第初頭の長い時期幅を設定した（植松1997）。しかし、特に赤焼土器の坏・皿の法量分布の集中域からは、下長橋 E U825・826、同 S X1105が、浮橋 S K16より全体に小型化（口径約10・底径約5以下）が進み、新しい高台類の出現など新相を呈する事から、阿部氏も指摘するように（阿部1999）、両者を古・新相に分ける事もできそうである。

6 当該期の土器編年の再検討

前項までに広域火山灰層を含む遺構の土器、各時期の特に供膳器の法量分布や底径、高径比、新資料の木原遺跡の追加などから当地域の10・11世紀の土器相を再検討した。

結果、前項で示した通りで、従来大きな変動はないが、木原遺跡を補完する事で、一部器種の出現時期や時期毎法量・形態に、具体的な数値や集中域の変化を看取れた。

最後に、再度当地域の当該期の土器群を概観し、以前まとめた変遷に本稿の知見を含め、古い順に記す。

Ⅳ～Ⅴ期（9世紀3/4～4/4期）：大坪遺跡 S G 1 F-4、山海窯跡 S Q 3・1・12b⁷⁾。

「供膳形態では須恵器の優位性が失われ、赤焼土器や黒色土器にその役割や形態が受け継がれ、歪みやロクロ目も同様に著しくなる。赤焼土器坏類は、まだ器高の高い法量のある形態で、以後徐々に小法量化」とした段階である（植松1997）。

供膳器主体は、無台の坏類で、須恵器はやや深身だが、赤焼土器・土師器は明らかに深身である。後者は口径が大（15前後）・中（13前後）型の法量分化がある。

主体的な中型坏は、須恵器・赤焼土器・黒色土器があり、ほぼ口径が約13前後、底径が約5～6強の同等

を取る。しかし、器高は、須恵器が約4前後、赤焼土器と土師器が約5前後と異なり、後者の器高が全体に高く深身である。高径比も須恵器が約1/3前後、赤焼土器と土師器が約1/2～1/3の範疇で重なる。

有台は、須恵器や赤焼土器の台付皿の小振りのものがあり、高台や口縁部などに施釉陶器模倣が看取れる。他に前代から通有の須恵器と土師器の深身の台付坏がある。

Ⅵ期（10世紀1/4期前半：火山灰降下期）：浮橋遺跡 S E 11・13 木原遺跡 S K302 下長橋 S K28・木原遺跡 S X938・977、山海窯跡 S Q 17・18・96。

「供膳形態として須恵器が払拭され、赤焼土器と黒色土器により形成。赤焼土器坏は外傾度が増し、口縁部も外反するものに変容。深身が崩れ出し、歪みやロクロ目痕が以後拍車かかる」とした段階である（1997植松）。

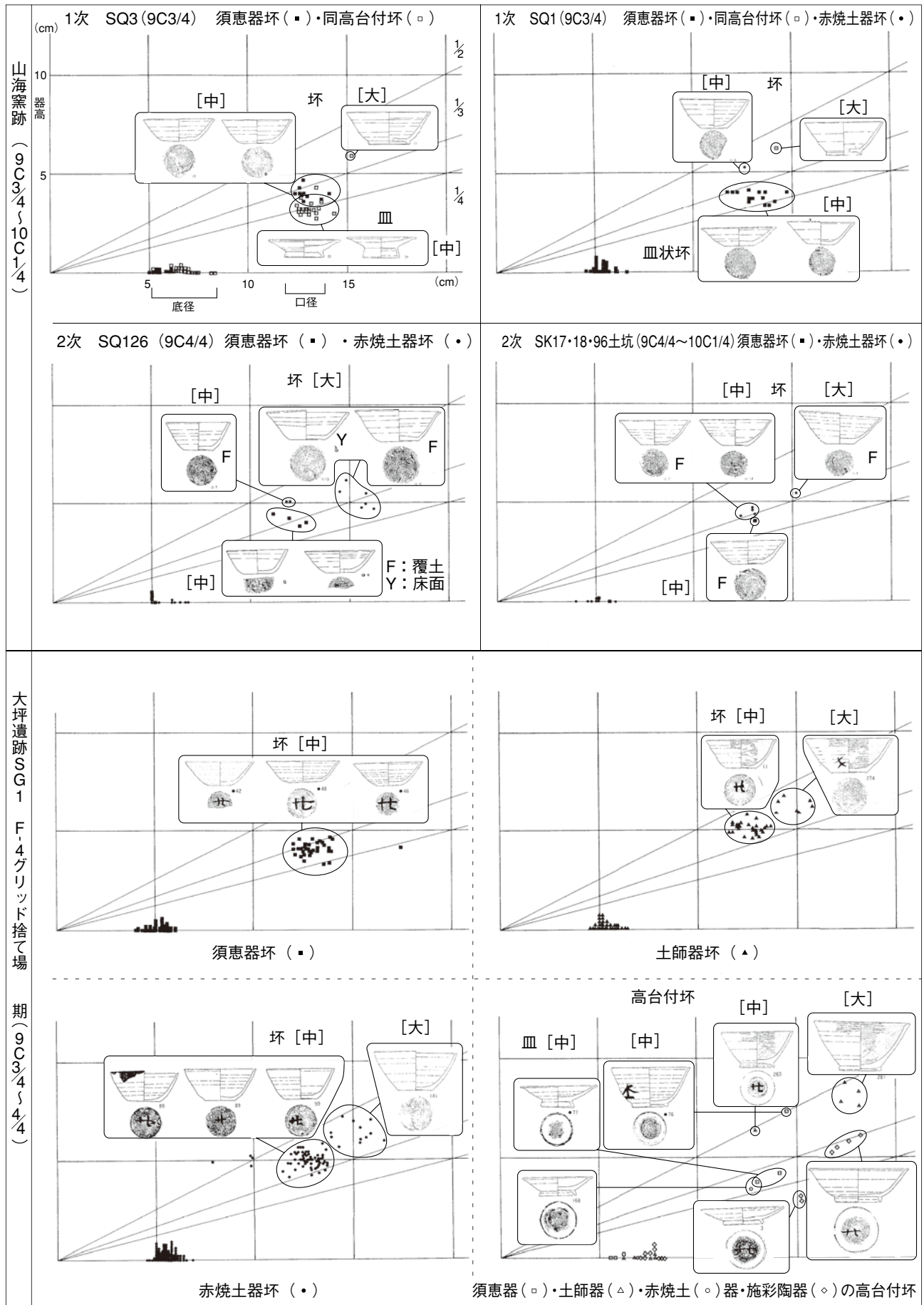
供膳器の主体は、この段階から確実に赤焼土器の無台の坏が主体を占め、前代のやや深身とやや身の浅いものがある。口径は前代（13前後）とそれほど変化はないが、器高の分布は明らかに低下し（4前後）、高径比も全体に約1/3に下がるものが多い。底径も下長橋 S K28・木原 S X938・977等は約5前後に集中が分布し、前代より小径化が進んだ事が看取れる。

土師器の坏は認められないが、木原遺跡や大坪遺跡など前後の様相から、以降は基本的に有台の内黒坏に限定され、一定量存続する。

有台は、一部木原遺跡で赤焼土器の中型の台付皿が認められるが、主体は土師器の台付坏に変わる。土師器の台付坏では、前代の深身の大・中型品の他に、内外面黒色のやや小振りの小型（12前後）がある。前述の中型の黒色土器の台付皿も認められる。

なお、以前筆者は、火山灰層より上位の出土から、当該期に赤焼土器で「新たに高台付小型皿が出現（下長橋 S K27）」（植松1997）としたが、後述する同形態の小型化や主体的な時期等から、下長橋 S K27例は時期的に降る可能性があり、本稿では次期以降としたい。

新器種として、木原 S K302や同 S X938・977、浮橋の同一墨書土器（S D101）から、一般的な赤焼土器の坏以外に高径比約1/3～1/4やの身のやや浅い皿状の坏、高径比約1/4以下の**中型の皿**が出現する。なお、下長橋 S K28では**両黒土師器の中型台付皿**が未だある。



第12図 山海窯跡・大坪遺跡 (9C後半) 出土土器の法量分布と高径比

Ⅶ期（10世紀1/4期後半：火山灰降下以後）：下長橋遺跡S B 1・2・4・木原S K 7。

「組成が赤焼土器に集約。器種も単純化し、一部黒色高台付碗が残り以後継続。赤焼土器供膳類は、前期より更に外傾度が増し身は浅くなる。煮沸は赤焼土器甕が主で口縁・口唇とも厚みがなくなり立ち上がり弱い。」とした段階（植松1997）。

供膳器の主体は、前代と同じ赤焼土器の坏だが、前代のやや深身より、身の浅いものが多い。口径は前代の13前後より小さいものが全体に認められ、器高が3～4前後に明らかに低下し、高径比は1/3～1/4の範囲に徐々に移る過渡的な様相のものが多く、分布域が拡散する。底径は前代と同等で縮小化には至らない。

有台では、前述赤焼土器の小型台付皿が認められ、特に下長橋S B 4は、口径10を切る坏身が浅い、高台がやや長い次期以降主体的な「足長高台」状を呈する。

新器種は、赤焼土器の有・無台の小型品の皿類が登場する。口径10内外で高径比が1/4を切る「**小皿**⁶⁾（下長橋S B 2）」（渋谷1989）や下長橋S B 4・木原S K 7の坏身の浅い**小型台付皿（足長高台状：下長橋S B 4）**がある。

Ⅷ期（10世紀2/4期）：下長橋遺跡S B 3・5・6。

「身の浅い坏を中心に小型皿、高台付皿。煮沸では赤焼土器鍋が残る。口縁形態は同甕と同じに変遷」とした段階（植松1997）。

供膳器の主体は、前代に続き、赤焼土器の浅身の坏が主だが、小型皿の増加、小型台付皿の微増が指摘できよう。主体の中型の坏は前代と口径（12.5前後）、底径（5～6前後）は同等だが、器高が全体に3～4に低下し、高径比は1/3～1/4の範疇にはほぼ収まる。なお、坏類には、高径比は中型の坏類と同等ながら、口径が10～11前後の「**小型皿**（下長橋S B 6）」が出現し、前述の小皿と中型の坏類と中間的な様相を示し、以降主体を占める。この坏・皿の器種組成は、時期以降の大・小の法量分化への過渡的な様相の始まりだろう。

有台では、小型皿は前代の形態を引きながら、一部次期以降に主体的な身が浅く、前代より更に小型で、高径比が1/4前後の器高が低い、次期に多い**直立する高台**のものが出現し、時期以降明確化する。この段階で一般的な全ての有台の皿類が組成に加わる。

Ⅸ期（10世紀3/4～4/4期）は、「供膳類は前期までの形態に加え高台付坏・柱状高台付小型皿が出現。全体に「赤焼土器の小型品が多い」（渋谷1989）』段階（植松1997）であるが、10世紀後半～11世紀初頭と長い幅を持たせたため、変遷した遺構を前頁で示したⅨ－1期（前半）とⅨ－2期（後半）に新たに分ける。

Ⅸ－1期（10世紀3/4期）：浮橋S K 16・境興野S K 159。

赤焼土器（身の浅い小型皿）が主体。土師器（深身の高台付坏）は若干。本段階で赤焼土器の小型皿の中で小型化と法量の集約が進行、底径も縮小化。赤焼土器有台の坏・皿類が概ね組成。赤焼土器の足長高台付坏出現。

Ⅸ－1期の供膳器の主体は、浮橋S K 16は祭祀遺構とされ資料の偏りも窺えるが⁸⁾、前代からの流れから赤焼土器の中型坏と次期に主体的な小型皿の中間的（高径比低下など）な形態の小型皿と考えられる。特に、小型皿を主体とする次期以降（下長橋E U 825・826・S X 1105）より、法量や底径の面から古相の段階と捉えられる。参考資料とした阿部氏が浮橋と同時期と指摘（阿部1999）する境興野S K 159も、小型の坏が主体を成す。小型の坏は、全体に小型の浅身で、口径が10～11前後、器高が3前後、底径は5以下が多い。高径比は1/3～1/4だが、浮橋は1/4に近く皿状を呈し、次期の下長橋E U 826との中間的な様相である。

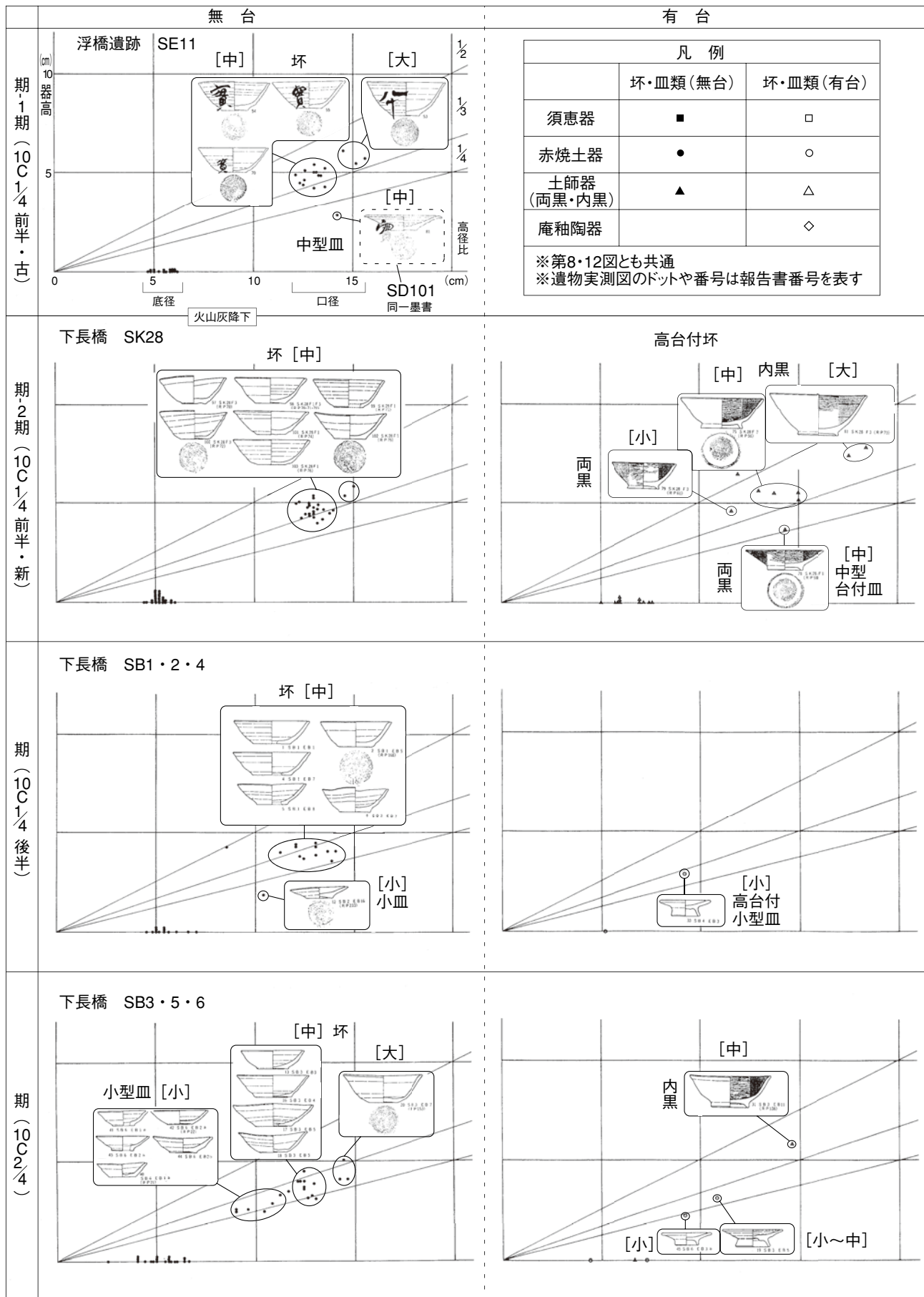
有台は、足長高台付坏の他に、土師器坏がある。法量は前代のⅤ・Ⅵ期と同様に大・中あるが、全体に坏身は深身がやや失われる。ただ、高径比は概ね1/2～1/3で、組成的に安定する前期（Ⅵ期）の形態は崩さない。

新器種では、渋谷氏が前述指摘した新要素の内、境興野遺跡で赤焼土器の高台が長い所謂「足長高台」を呈し、坏部が体部～口縁部が直線的で大振りの深身の**足長高台付坏**が供伴する。

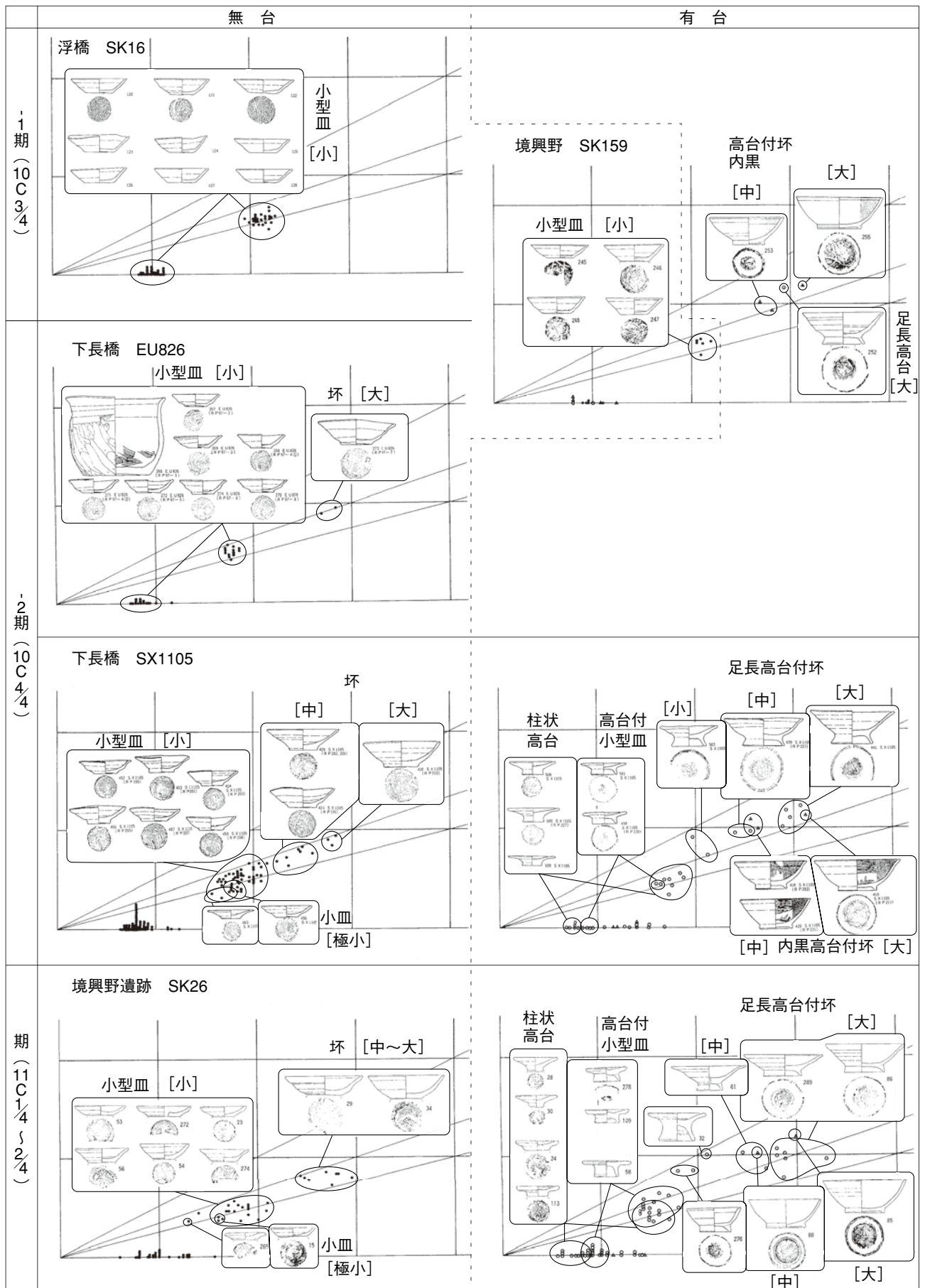
Ⅸ－2期（10世紀4/4）：下長橋遺跡E U 825・826・S X 1105。

下長橋E U 825・826は埋納遺構のため資料に偏りも窺えるが、S X 1105も含め、赤焼土器の小型皿が主体を占める段階である。

新器種では、高台部が柱状の**柱状高台付皿**があげられ、Ⅶ期で認められた直立する小型高台付皿と同等の口径や器高を示す。他に小型皿の一形態とも考えられる



第13図 10～11世紀の土器の法量分布と高径比 (1)



第14図 10～11世紀の土器の法量分布と高径比 (2)

が、口径（8 前後）・器高（2 前後）が非常に小さく高径比が1/4以下の次代中世のかわらけ状の**小型小皿**も出現（変容）する。

供膳器では、前期の主体と同形の中・大型の坏類は残るが、減少し、小型皿が主体を成す。小型皿は、前期（Ⅷ期）より口径は8～9 前後に縮小し、器高も2.5 以下のものもあり、底径も5 以下に集約され、全体に小型化する。高径比は1/3～1/4 前後だが、小型化に伴い1/4 以下のものが散見され、非常に身の浅い低比率のものが多し。坏類では、中型の坏は前期より少なくなるが、身の浅い前期（Ⅷ期）からの大型のものが一定量認められ、前期までの古代の様相を残す。

有台では、下長橋 S X 1105 で小型の柱状高台付皿や直立する小型高台付皿があり、他に前期（Ⅸ－1 期）の足長高台付坏や土師器がある。法量的に前者は小（口径10 前後）・中（口径8 前後）・大（口径10 前後）で、後者は同等の中・大型に分化が残る。両者とも高径比は、前期（Ⅸ－1 期）とほぼ同じだが、やや坏部が全体に浅くなり、1/3 に近い分布である。

X 期（11世紀1/4～2/4期）：境興野 S K 26。

「従来の坏・高台坏・小型皿・高台皿の食膳具の基本的器種構成が認められる最後段階。かわらけへの移行期。食膳具の組成のほとんどを赤焼土器が占める。土師器高台碗は極めて少量確認され、次期に存続するか不明確。赤焼土器は各器種全般に器壁が厚く、厚ぼったい作りになる。小型坏（本稿は小型皿）は若干の法量縮小傾向が認められ、小型皿（本稿は小皿）は別タイプとして存在するものの、形態的に皿形に近いものが主体を占める」

（伊藤1998）段階である。

他に供膳器の法量や高径比等では、伊藤氏の指摘と重なるが、主体を占める小型皿の口径約6 前後まで縮小するものがあり、全体に器高も低下し、高径比も1/4 前後に集約される。坏では、中型の坏類が不明瞭になり、大型のみとなる。中型品の高径比は、前期（Ⅸ－2 期）と比べれば1/3 に近いものから1/4 に近い比率に下がり、やや身が浅くなる。土器組成では、この段階で無台の供膳器が小型皿と中～大型坏に集約され、小・大型の法量の二分化が表れ、次代の当地域の中世かわらけ（大楯遺跡）と同様で注目される（第15図）。

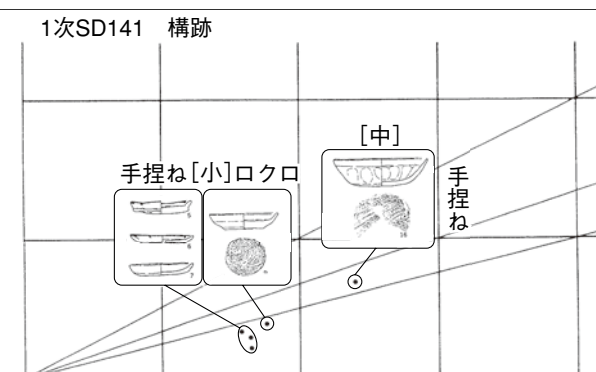
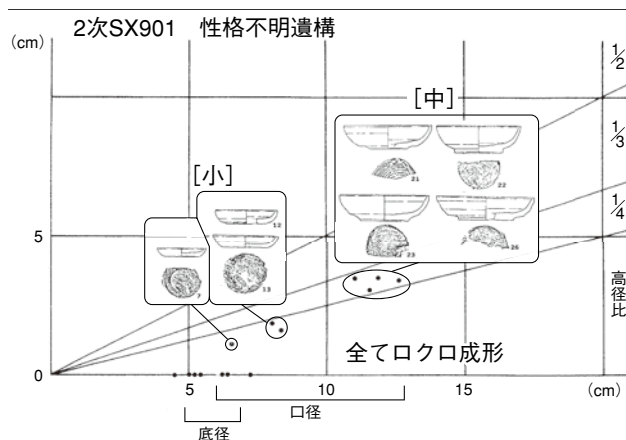
有台では、前期の柱状高台付皿や、直立する小型高台付皿の皿部が、非常に浅くなり一部所謂T字状を呈するものも現れ、口径・器高とも縮小する。足長高台の坏は、坏部が前期から更に浅身になり、高径比も1/3 前後と低く、坏と同様の变化をするようである。土師器坏に前期からの大きな変化は認められない。他に、口径10 前後を測るやや大きめの直立する足長の高台付皿なども現れ、やや多樣的である。

7 まとめ

最後に、前項までの成果を基に、再度当地域の9世紀後半から12世紀前半までを、特に当該期の供膳器主体の赤焼土器と土師器黒色土器を中心に、土器組成や形態、新相の土器の出現期等を古い順に整理し、当時の時代背景との関連や画期などを検討する（第16図）。

9世紀3/4～4/4期：須恵器（やや深身の中型坏）・赤焼土器（深身の中型坏）・土師器（深身の中型坏）が

遊佐町大楯遺跡出土のかわらけ



第15図 大楯遺跡の中世かわらけの法量分布と高径比

主体。赤焼土器坏・黒色土器坏・高台付坏が中・大型に法量分化、以後基本的に継続。須恵器高台付皿（施釉陶器模倣）一定量存在。中赤焼土器の中型台付皿出現。

10世紀1/4期前半： 須恵器坏類が激減。赤焼土器（深身の中型坏・やや身の浅い中型坏）・黒色土器（深身の高台付坏）が主体。新段階で赤焼土器の深身の坏が低傾化。赤焼土器の皿状の坏・中型皿が散発的に出現。

10世紀1/4期後半： 赤焼土器（身の浅い坏）主体。赤焼土器の小型皿・身の浅い小型台付皿が出現。

10世紀2/4期： 赤焼土器（身の浅い中型坏）が主体。黒色土器（深身の高台付坏）は若干、減少化。本段階で主体の赤焼土器の中型坏の法量分化がやや拡散。本段階で小型の坏類が明確化。小型皿が一定量出現。

10世紀3/4期： 赤焼土器（小型皿）が主体。黒色土器（やや深身の高台付坏）は若干。本段階で赤焼土器の坏・皿類の中で小型化が進行。この段階で赤焼土器の一般的な有台の坏・皿類が概ね整う。赤焼土器の足長高台付坏出現。

10世紀4/4期： 赤焼土器（小型皿）が主体。赤焼土器（身の浅い中・大坏）少量残る。赤焼土器（柱状高台付皿・直立する高台付皿・足長高台付皿）が若干。黒色土器（やや深身の高台付坏）は若干。本段階で当該期の新器種が全て組成。多様な赤焼土器の皿類（極小小皿や有台含む）の器種組成。柱状高台付皿出現。

11世紀1/4～2/4期： 赤焼土器（小型皿・柱状高台付皿〔T字型含む〕・直立する高台付皿）が主体。赤焼土器（足長高台付皿）が少量。赤焼土器（身の浅い中～大型坏）が若干。黒色土器（やや深身の高台付坏）は若干。本段階で小型皿と中型～大型坏の法量分化。有台類新器種内での多様化（皿類の小型化含む）。中世的土器組成への変化。

11世紀3/4～4/4期： 本地域で不明。伊藤氏は秋田県の大釜遺跡の大・小のかわらけと黒色土器の組成の可能性を指摘する（伊藤1997）。

12世紀1/4～2/4期以降： 大楯遺跡の創建期の土器群（年輪年代）。中世かわらけと輸入陶磁器が組成。

さて、上記のように庄内北部地域の10・11世紀の前後を含む様相を概観してみた。当該期は、一般に律令制の崩壊期と言われ、筆者も以前言及した事がある。筆者は、土器相や集落分布等から「簡易な赤焼土器の増加や、

集落の減少と集約傾向」をあげ、「在地官人層や富豪層の台頭」に伴う「次代の荘官とされる大楯遺跡周辺への遺跡の集中」に繋がるものとした（植松1997）。

陸奥国では、9世紀後半（873年）の「三代実録」に、在地勢力の台頭や律令制の崩壊の記事がある。近年、県内の9世紀後半～10世紀初頭の米沢市古志田遺跡の文字資料等からは、「律令制崩壊に伴う在地領主や富豪層の台頭」（手塚・荒木他2001）に伴う給食や祭祀の行為の可能性も報告されている。

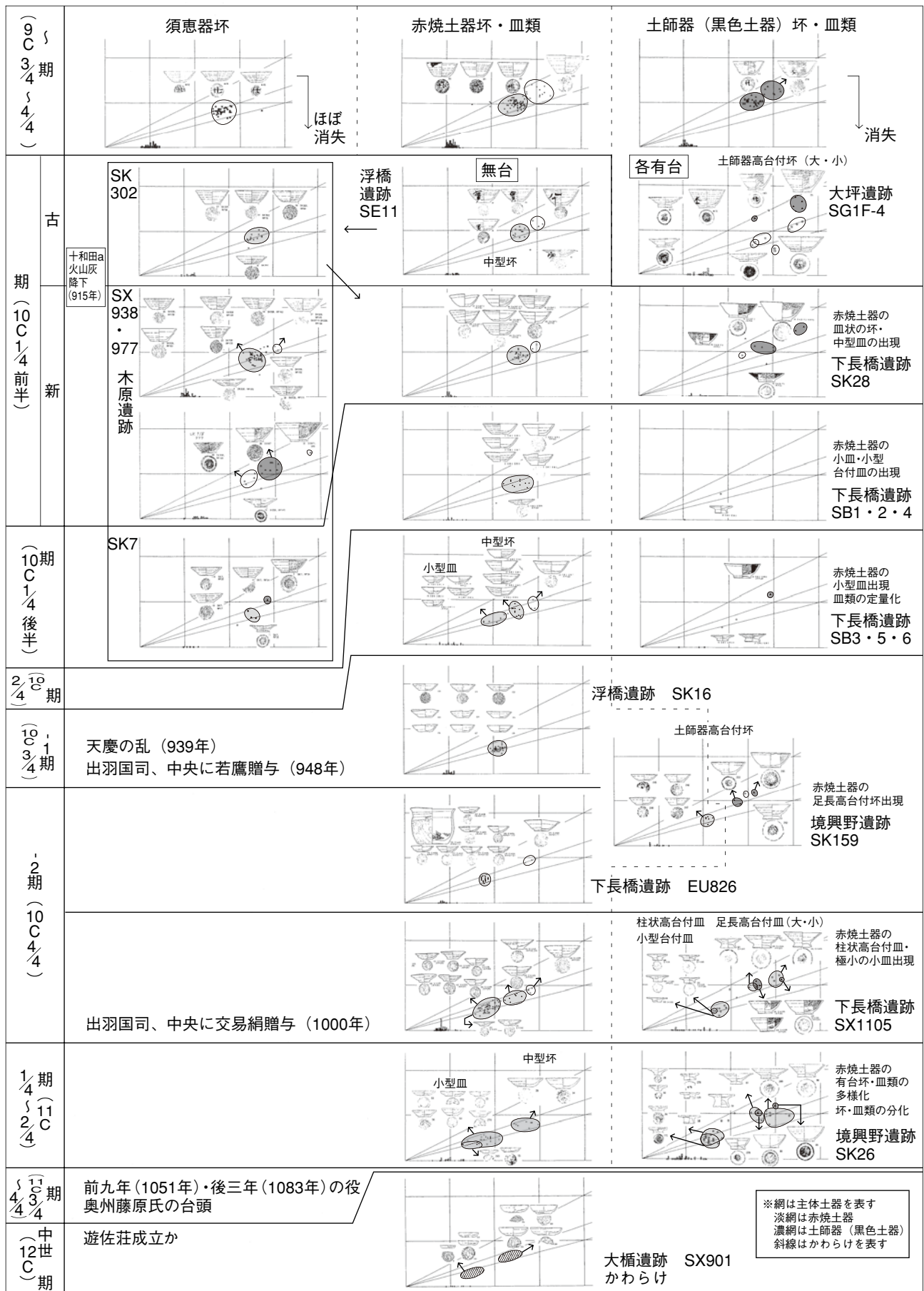
本地域でも当該期の浮橋S K16等の祭祀遺構とされる土器の一括廃棄土坑が、この時期多く散見されるのも、それらに類似した行為の表れと考えられ、前述土器相からは少なくとも10世紀2/4～3/4期には同様の状況が推測され、一つの画期（Ⅷ期）と捉えられる。

しかし、筆者は、本稿や近年の研究により、地域によって当該期が一樣に律令制の崩壊期とはいえない面があると昨今考えている。

当地域（遊佐町周辺）は、秋田城の文字資料や10世紀前半の『和妙類聚抄』（935年）等から、従来より出羽国飽海郡「遊佐郷」周辺と推定され、『延喜式』（927年）の「遊佐駅」が所在した地域とされてきた。また、当地は、鳥海山麓に位置し、9～10世紀中葉に連続して叙位（838年）される式内社の大物忌神社が存在し、全体に当地域は、県内にでも律令制の官的要素が強く残る地域とも考えられる。更に当地域のすぐ南には、当該期の出羽国府とされる城輪柵跡が設置され、その機能は概ね10世紀代にも機能していたとされる（小野1997）。

土器相からは、簡易な焼成施設で作られる小型の赤焼土器が主体とはいえ、少なくとも10世紀前葉までは前代までの須恵器窯と同じ窯場で赤焼土器は生産され、集落でも歪み等が著しいものでも受容する状況がある。また、前代から続く土師器高台坏（内黒）や赤焼土器坏も土器組成の一定量を占め、11世紀前葉まで存在し、古代の系譜を残す。

なお、文献資料では、10世紀中葉（天慶2年：939年）には、9世紀後葉の元慶の乱（878年）に続き、出羽国の秋田城周辺で俘囚（蝦夷）の反乱があった。中央や国府では、その鎮圧にあたり陸奥国への援兵要請や「（出羽）国内の浪人・高下・雑人を問わず軍役にあてる」として官符・勅符等で細かく対処する。他にも10世紀中葉～11



第16図 庄内北部の古代末～中世の土器変遷

世紀初頭には、出羽国司（守）級が、中央の関白等に若鷹（948年）、交易絹（1000年）を贈与しており、一部国司（出羽国府）と中央との密接な関連が窺える。

他に、筆者が以前本県内陸部の今塚遺跡を主とした官衙的な集落を検討した結果から、当該期にも「官的な面と在地的な面を併せ持つ在地領主層」の存在が推測され、在地領主自体も官的な要素を受け入れることで、在地勢力を延ばす事ができた辺境独自の律令制度があったためとも考えられる（植松2003）。官的な要素が多いとされる下長橋遺跡などもこれら遺跡に相当するかもしれない。

これらからは、少なくともこの時期までには、軍団制の凋落や須恵器供膳器の生産の中止等の官的要素の衰えも一部指摘できるが、全体に国府を中心とした律令的な機能がそれほど崩れない地域であった事も考えられる。

11世紀中葉～後半には、古代末の東北の戦乱として著名な前九年（1051年）・後三年の役（1083年）があり、陸奥国や出羽国北半（秋田県）が主戦場になった。この戦乱では、陸奥国北方の安倍氏や出羽国仙北の清原氏等の俘囚長の活躍がよく知られ、本県の様子は明らかでないが、この段階で同様に郡司層の自立が可能になったのであろう。他県の土器相からは、須恵器の貯蔵具の衰退も含め、明らかに律令的土器から中世的土器相に変容していく。

当地域ではこの時期は不明だが、土器相からは、前期（11世紀前半：X期）には、坏・皿類に次代中世かわらけに特有の小・大の法量二分化が認められ、その萌芽としてもう1つの画期を与えられよう。そして、これが後述する本地域の特徴である荘園公領制下の日本海側北限の「遊佐荘」が当地に導入される下地となったと推測される。

12世紀代に入り、当地域では、「遊佐荘」が成立する。12世紀中葉（1153年）の左大臣藤原頼長の本県荘園の年貢増徴の記録があり、奥州平泉の藤原基衡がこれを拒み減軽させている。これは、近年遊佐荘を管理した荘官は大楯遺跡とされ、在地領主は不明ながら、「遊佐荘は平泉の藤原氏に寄進され、さらに平泉から摂関家の藤原氏に二段階の寄進、(中略) 地方に成長してきた豪族と公権力との関わり、或いは在地豪族同士の連携と中央勢力と結びつく構造」（佐藤1991）が看取られる。

そして、前期で荘園公領制の北限に自立し始めたであ

ろう当地域の郡司層は、在地の主導的な役割を担い、確信的に律令的体制から外れ（選択か）て、この段階で本格的に次代の政治体制を取り込み、中世的在地領主層に成長していくのであろう。

最後に本稿を作成するにあたり、小野 忍氏、酒井英一氏、佐藤庄一氏、阿部明彦氏には多大なご指導を得た。特に小野氏には、城輪柵跡に関わる論考と、折にふれ「寒河江市平野山古窯の研究」を再読させて頂き、古代土器研究の視点を通観している。近年東北城柵官衙検討会等でお会いする機会を得て、古代を多面的に御教授を頂いている。深謝したい。

註

- 1) 川崎氏は、同報告書考察で最も新しい土器相として平形遺跡のSD4資料を提示し、注目されるが、平形遺跡報告書ではSD4の資料が明らかでなく、本稿からは除外した。
- 2) 所謂「赤焼土器」は、基本的に酸化炎焼成のロクロ使用、非黒色処理の土器で、東北地方各地では従来から「赤褐色土器」、「須恵系土器」、「土師質土器」、「土師器」等と呼称されて来た。本稿では、各地域の地域的特質や研究史を重視し、本県で一般的な「赤焼土器」とした。
- 3) SX938・977には一部明らかに古相の須恵器高台坏が散見されるが、同遺構の火山灰層下位から柱穴等が確認されており、それに対応するのかもしれない。
- 4) 以前も指摘した事があるが（植松1997）、一部火山灰を含む遺構に明らかに古相の土器群が出土する遺跡（例えば小深田遺跡SK等）がある。矛盾するようだが、文献にもある当地域の鳥海山の噴火（9世紀代）の火山灰降下も視野に入れる必要がある。
- 5) 理化学分析的には、火山灰の一次堆積は、10以上の厚い堆積が必要との事である。しかし、広域火山灰降下の遠距離地では薄い堆積もあるだろうし、二次堆積だとしても火山灰層として覆土に広範囲に含まれる事を考慮すれば、少なくとも降下後間もない時期の堆積と推定はできよう。
- 6) 「小皿」・「柱状高台皿」等の器種の名称は、10世紀代を通用する下長橋に準拠した。以前拙稿の「小型の坏」は「小型皿」に直した。なお、報告書では「小型皿」と「小皿」の区別が「極端に身の浅い皿」と全体に判然としないため、本稿では本文中にも示した概略的な口径、高径比の定義に従い、「小型皿」・「小皿」・「小型小皿」の名称を付し、一部変更した。
- 7) 土器編年には、一般的に窯跡の一括資料（生産遺跡）を併用して考える事が多いが、本県の10世紀初頭以降の赤焼土器を焼成したとされる窯跡や「焼壁土坑」（山海窯跡）等は未だ判然としない。そのため土器編年・変遷は、集落遺跡の一括性が高く、年代観を比定する供伴資料を含む遺構を抽出している。
- 8) 埋納遺構等の特殊な遺構の性格上、土器形態にも形態がほぼ共通する等の特殊性も窺えるが、全体的な覆土や重複関係から概ね一括性の高い当該期を表す土器と判断した。

引用・参考文献

- 阿部明彦 山形県教育委員会『宅田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第72集（1983）
- 阿部明彦・植松明彦 山形県教育委員会『木原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第186集（1993）
- 阿部明彦 山形県埋蔵文化財センター『北目長田・櫛待・堂田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第24集（1995）
- 阿部明彦・伊藤邦弘 山形県埋蔵文化財センター『出羽の古窯跡（山形県）』課内学習会資料（1995）
- 阿部明彦他「庄内平野」『東北地方の古代集落』古代城柵官衙遺跡検討会（1998）
- 阿部明彦・水戸弘美「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』（1999）
- 伊藤武士 「出羽における10・11世紀の土器様相」『古代北陸土器研究会』（1998）
- 岩見誠夫・能登谷宣康・船木義勝「山形県の須恵器及び須恵器窯の編年」『山形考古』第4巻第2号（1988）
- 植松暁彦「庄内高瀬川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古第6巻』（1997）
- 植松暁彦「今塚遺跡の再検討とその性格について」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』（2003）
- 小野 忍 「城輪柵跡」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会（1997）
- 川崎利夫 山形県教育委員会『境興屋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第46集（1981）
- 古代の土器研究会『律令の土器様式の西・東』古代の土器研究会シンポジウム（1993）
- 佐藤庄一 「城輪柵とその周辺村落」『庄内考古』第19号（1985）
- 佐藤禎宏 『大楯遺跡発掘調査報告書』遊佐町教育委員会（1991）
- 渋谷孝雄 山形県教育委員会『下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第130集（1988）
- 高桑弘美「出羽のかわらけ」『中世奥羽の土器・陶磁器』（2003）
- 手塚 孝・荒木志伸他『古志田東遺跡発掘調査報告書』米沢市教育委員会（2001）
- 山形県教育委員会『山形県史』第1巻（1982）
- 山形県教育委員会『地正面・前田・塚田・佐渡遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第51集（1982）
- 山形県教育委員会『新青渡遺跡1次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第67集（1983）
- 山形県教育委員会『大楯遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第139集（1989）
- 山形県教育委員会『小深田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第140集（1989）
- 山形県教育委員会『浮橋・下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第141集（1989）
- 山形県教育委員会『小深田・下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第142集（1989）
- 山形県教育委員会『大坪遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第166集（1991）
- 山形県教育委員会『山海窯跡群第2次・山楯7・8遺跡・山楯館跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第172集（1992）
- 山形県埋蔵文化財センター『木原遺跡2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第8集（1994）
- 山形県埋蔵文化財センター『大坪遺跡2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第23集（1995）
- 山形県埋蔵文化財センター『上高田・木戸下遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第25集（1995）
- 山形県教育委員会『大楯遺跡1次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第121集（1988）
- 山形県教育委員会『大楯遺跡2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第137集（1989）
- 山口博之 「遊佐荘大楯遺跡の成立」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』（2003）
- 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』（1994）
- 遊佐町「鳥海山の火山活動」『遊佐町の歴史』（1974）